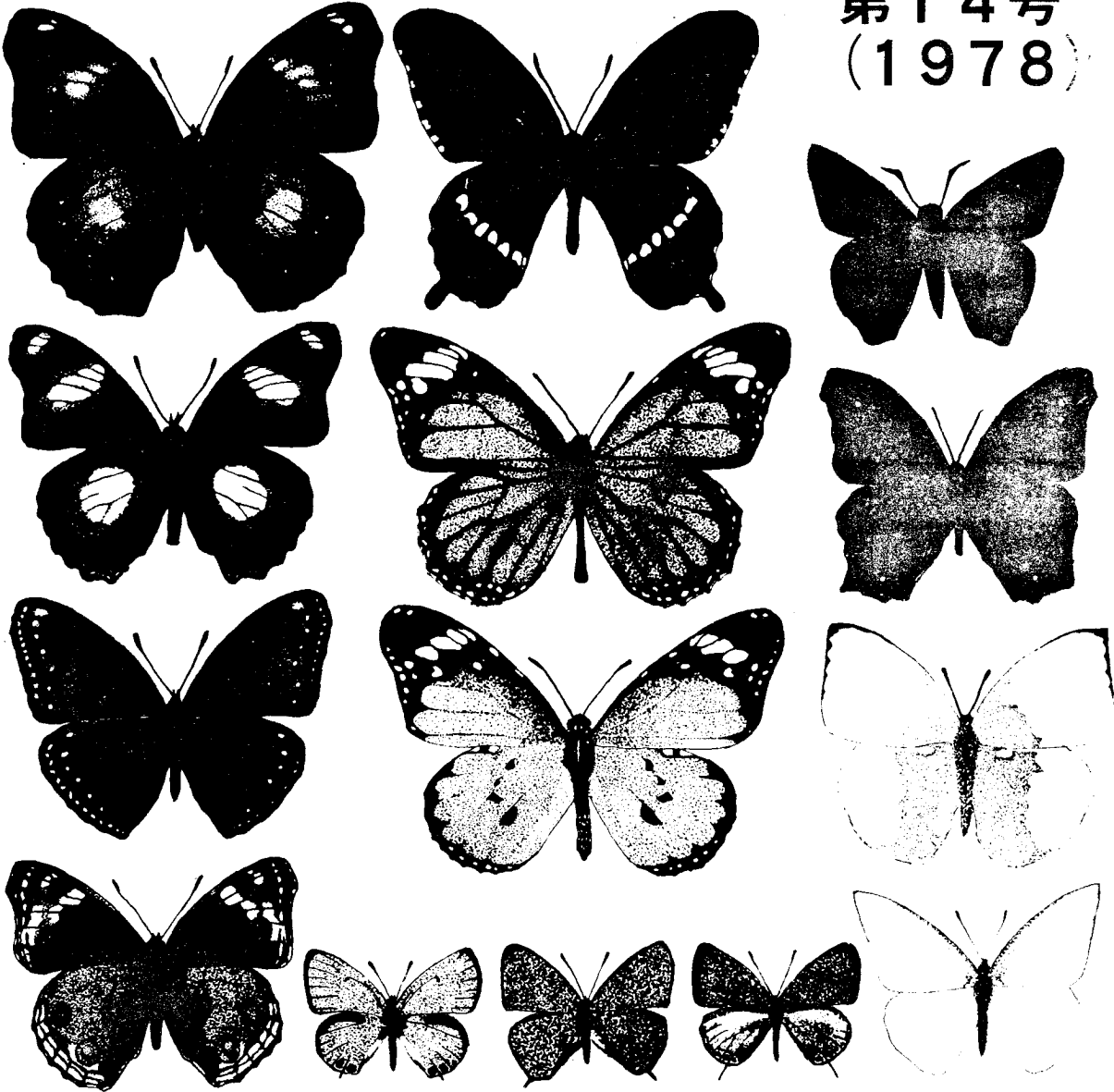


まのせ

第14号
(1978)



鹿児島県立加世田高等学校

生物部

表紙説明

この蝶を探そう!

表紙に出ているのは、いずれも迷蝶と言われる珍しい蝶14種。すべて、南陸西部で採集されたことのある、鹿角島は沖繩に次いで全国的に迷蝶の多い所。南陸はその中でも多い場所。メスカムヲサキ、ウスイロコマは毎年のように採集し、迷蝶の内容は珍しい種が多い。

種名は第一段左より、リウキエムヲサキ、シロヒアケハ、オキナフヒロウトセリ、第二段、同以、メスカムヲサキ、スジクロカマダラ、ウスイロコマチヨウ、第三段、同以、ヒヤマムヲサキ、カバマダラ、ウズギシロチヨウ(キンモン型)、第四段、同以、アタテハヒキ、オシロジミ、アマミウラナミジミ、ルリウラナミジミ、カワカミシロチヨウである。

(注) 図の倍率は一定ではありません。おしらせ。

目 次

〔定例調査〕

ネムノキに来るアゲハ類(1977).....	鳥飼 英俊	1
ネムノキに来るアゲハ類(1978).....	黒葛 俊弘	5
1978年ネムの木の落花数調べ.....	木村 俊	13

〔採集会〕

亀ヶ丘採集会.....	中田 悦朗ほか	14
サソリモドキ採集記.....	鮫島 重喜ほか	17
塘池採集会.....	中堂蘭さとみほか	18

〔個人研究・調査・資料その他〕

南薩西部のツマベニチョウ.....	大迫 達洋	21
加世田川(或る地点での野鳥).....	末永 俊英	30
シラサギの行動.....	〃	33
アカショウビン.....	〃	34
アオバズクのペリット調査(1978).....	中田 悦朗	36
南薩地区の蝶の分布.....	黒葛 俊弘	44
甲虫記.....	川原 浩二	47
糸とクモの生活.....	〃	49
学校周辺の蜘蛛の特徴の記載と採集記録.....	平山 太思	50
ホタルについて.....	大坂 あけみ	53
ヒメハルゼミ.....	木村 俊	54
塘池のプランクトン.....	竹原 和人	55
校内に多いクモ.....		58
1978年文化祭反省.....	黒葛 俊弘	59

〔短 報〕

1978年度,蝶の初見日(その1).....	中田 悦朗	4
1977年春の甲虫.....	〃	12
秋日のコサメビタキ.....	末永 俊英	32
サツマシジミの早い記録.....	黒葛 俊弘	35
ミカドアゲハの記録.....	〃	43
晩秋のヤクシマルリシジミの記録.....	〃	46
1977年度蝶の初見日(その2).....	中田 悦朗	48

1977年 蝶の採集記録(その1).....	中田 悦朗	48
" " (その2).....	"	52
ゲンジボタル.....	大坂あけみ	53
1977年 蝶の採集記録(その3).....	中田 悦朗	54
1977年度タイワンツバメシジミの記録.....	黒葛 俊弘	57
シマアカネ.....	"	60
1977年 蝶の採集記録(その4).....	中田悦朗 黒葛俊弘	60
1978年度の活動状況.....		59
部員名簿.....		61
編集後記.....		62

ネムの木に来るアゲハ類 (1977年)

2年 鳥飼 英俊

今年もまたネムの木に花が咲き始め、アゲハチョウが飛来する季節になり、例年通りアゲハチョウ類の飛来頭数を観察し始めた。

今年は例年より暖かいせいから早く飛来し始め、6月7日～6月30日まで観察した。今年は蝶を調べているのがぼくひとりだったので、毎日3回の観察はやはりきつかった。それに多く飛来したときは数えるのがたいへんだった。

〈観察目的〉

- ① 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数の概要を知りさらに前回のものと比較してみる。
- ② 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数割合より、どのアゲハチョウ類が最も、加世田市近郊に多いか調べる。
- ③ 各アゲハチョウ類の飛来数より発生時期を調べる。
- ④ 朝、昼、夕方、の時間の違い、天候の変化などの違いやその他のことから、飛来個体数が変化するか。また、変化するとすれば、その直接的原因は何かを調べる。またこれよりさらにその習性を検討してみる。

〈観察方法〉

- 観察期間 1977年 6月7日～6月30日
- 観察時間 (A) 8:25～8:30
- (B) 13:05～13:10
- (C) 16:50～16:55

〈観察対象アゲハチョウ〉

- ナミアゲハ (*Papilio xuthus* Linnaeus)
- ジャコウアゲハ (*Atrophaneura alcinous* Klug)
- クロアゲハ (*Papilio protenor* Cramer)
- ナガサキアゲハ (*Papilio memnon* Linnaeus)
- モンキアゲハ (*Papilio helenus* Linnaeus)

なお、今年度もアオスジアゲハの飛来はみられなかった。

〔表1〕

月・日		6/7	8	9	10	11	13	14	15	16	17	18	20	21	22	23	24	25	27	28	29	30	計	総計
曜日		火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土	月	火	水	木		
天候	A	○	◎		◎	◎	⊕	◎	○	◎	◎	⊕	⊕	⊕	◎	◎	○		○	◎	○	⊕		
	B	○	◎		◎	◎	⊕	◎	○	○	○	◎	◎	◎	○	⊕	◎	◎	◎	◎	◎	⊕		
	C	○	◎		○	○	◎	◎	○	○	○		⊕	◎	⊕	◎	○		◎	◎	◎	⊕	⊕	
気温	A	23	27		25	24	22	24	22	26	26	25	23	25	22	24	24		24	26	26	27		
	B	24	24		27	27	27	27	24	27	26	26	27	28	23	29	27		26	29	28	30		
	C	23	26		27	24	28	27	22	26	25		28	27	23	27	26		26	28	29	31		
アゲハ	A		1		1	1	1	2		4	7	6											23	
	B	2		1	1		6	3			1	5	1	1					1				22	5 6
	C		2				1	5		1				2									11	
ジャコウ	A										3	4	3	3		3	1			3			20	
	B											3	1			2	2		2				10	5 7
	C						2						7	2	2	3	4		6			1	27	
クロ	A						1			5													6	
	B						3					1					1						5	1 4
	C						1	2															3	
ナガサキ	A										1		2							1			4	9
	B												1	2									3	
	C												1										2	
モンキ	A																						0	
	B				1																		1	3
	C							1						1									2	
アオスジ																							0	0
計		2	3	1	4	1	13	15		10	12	19	16	11	2	8	8		9	4	0	1		139

〈1〉1977年度の各アゲハ類の飛来個体数の概要と前年との比較

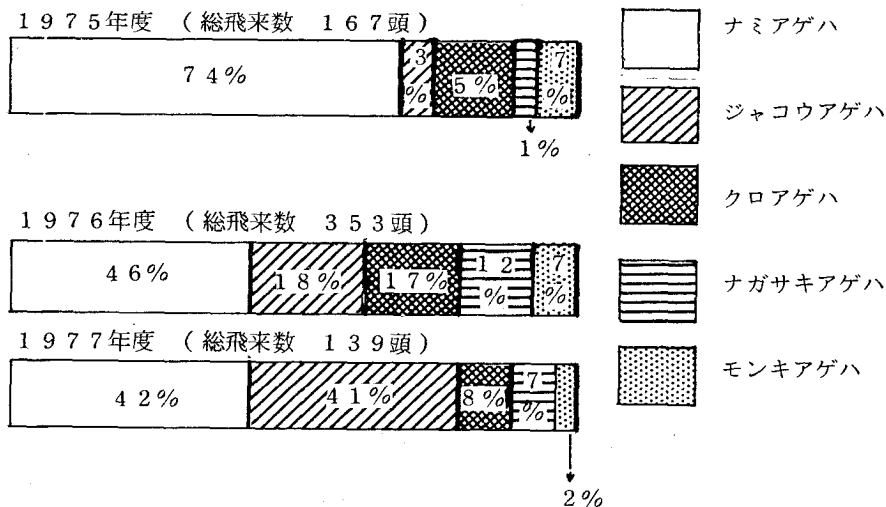
(第2図)	1977年	1976年	1975年	1970年	1967年
ナミアゲハ	56	163	123	256	124
ジャコウアゲハ	57	63	5	126	43
クロアゲハ	14	61	25	24	48
ナガサキアゲハ	9	41	1	5	15
モンキアゲハ	3	25	13	5	10
	139	353	167	416	240

〈考察〉

最初にふれたように今年は例年に比べて暖かく、花が早くから咲きはじめたうえ、途中でひどい雨が降り、ほとんどの花が散ってしまったりしたことがあり、飛来した頭数がかなり少なかった。しかし昨年は、353頭も飛来したのに半数以下に減ってしまったのは悲しいことだ。

種類別に見てみると、例年数多く飛来しているナミアゲハが全体に占める割合が非常に小さくなっている。逆にジャコウアゲハの割合が大きくなっている。これだけは今までに見られなかった今年の特徴ではないかと思う。これらのことは今年だけのことであろうか、それともこれから先このような傾向が続いていくのであろうか。来年の資料がたのしみである。

(第3図) (種類別飛来数割合)



上の第3図からもわかるようにこのところナミアゲハの割合の減少とジャコウアゲハの割合の増加がとくに目だっている。それに伴いその他のものが減少している。これらのことはここだけのことか、それとも他の地域でも同じようなことがおこっているのか、もっとくわしく知りたいところである。今後観察を続けていく中で、人員の余裕があれば、このネムの木だけでなく校外の別の木に飛来する頭数をも調べてみてはどうかと思う。

〈反省〉

今年はいくら飛来頭数が少なかったとしても、1人で1日3回、約1ヶ月間調べるのには、かなり苦労した。今後は部員の確保とともに、2～3人のグループに分けて、分担してやればもっと正確に、楽に調べることができるのではないかと思う。

観察の途中で、ある時ひどい雨と風の時があった。まさか今日は来ないだろうと思いながらもネムの木を見てみた。すると一頭のナガサキアゲハが風に飛ばされ、雨にうたれながらもやっと飛んできていた。私はこの姿を見て、自然の厳しさとそれに対する生き物の生命力の強さを知らされた。

今年も例年と同じようなまとめ方になってしまった。今年こそは自分なりにうまくまとめてみようと思ったのだが、だめであった。これからは、伝統的なものはそのまま残し、変えるべきところは、もっと変えて興味深いものを作っていつまでももらいたいものである。

最後に、この観察だけは、過去の諸先輩がたの努力によって続けられたものであるから、蝶班の誇りとしていつまでもいつまでも続けていつまでもほしいものである。

1977年度 蝶の初見日 その1

2年 中田悦朗

ジャコウアゲハ	4月 1日	大浦町越路	1♀目撃	大迫達洋
クロアゲハ	4月 6日	加世田市竹田神社	1♂ "	"
アオスジアゲハ	4月11日	加世田高校内	1頭 "	"
ナガサキアゲハ	4月12日	"	1♀ "	"
モンキアゲハ	4月15日	"	1頭 "	鳥飼英俊
スジグロシロチョウ	3月20日	大浦町越路	+	大迫達洋
ツマベニチョウ	4月24日	笠沙町赤生木松木場	1♀目撃	"
キチョウ	5月 8日	笠沙町松木場	+	"
ツマグロヒョウモン	3月20日	大浦町越路	2♀目撃	"
コムスジ	4月 1日	"	1頭採集	"
イチモンジチョウ	4月24日	笠沙町赤生木松木場	1頭目撃	"
ゴマダラチョウ	4月29日	大浦町亀ヶ丘山頂	1頭 "	"
コムラサキ	5月 8日	加世田市小湊	1♂ "	"
(黒色型)				
アサギマダラ	4月29日	大浦町亀ヶ丘登山道	+1♀採集	石井浄浩
ベニシジミ	3月20日	大浦町越路	1♂1♀採集	大迫達洋
アゲハ	3月21日	大浦町越路	1頭目撃	"

{ +は少ないの意 }

ネムノキに来るアゲハ類 (1978年)

2年 黒 葛 俊 弘

今年もネムノキの花が咲き始めた6月13日から部室の前のネムノキに飛来するアゲハチョウ類の観察を始めた。今年は、例年になく温暖で個体数の変化にどのような影響を及ぼすかを中心に、朝、昼、夕の3回、5分間ずつ観察した。しかし、なかなか根気もいる仕事で、数え漏れなどもあり、記録が完全でないことが、心残りです。

< 目 的 >

- ① 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数の概要を知りさらに前回のものと比較してみる。
- ② 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数割合より、どのアゲハチョウ類が最も、加世田市近郊に多いか調べる。
- ③ 各アゲハチョウ類の飛来数より発生時期を調べる。
- ④ 朝、昼、夕方時間の違い、天候の変化、などの違いやその他のことから、飛来個体数がどのように変化するか、その変化の原因は何かを調べ、その習性を検討してみる。

< 観察方法 >

- 観察期間 1978年 6月13日～7月3日
- 観察時間 (A) 8:30～8:35
(B) 13:05～13:10
(C) 16:50～16:55

< 観察対象アゲハチョウ >

- ナミアゲハ (*Papilio xuthus* Linnaeus)
- ジャコウアゲハ (*Atrophaneura alcinous*)
- クロアゲハ (*Papilio protenor* Cramer)
- ナガサキアゲハ (*Papilio memnon* Linnaeus)
- モンキアゲハ (*Papilio helenus* Linnaeus)

今年は、アオスジアゲハの飛来も7月にはいって見られたが、対象アゲハでなく〔表Ⅲ〕には記録されていない。

(表 1)

月 . 日		13	14	15	16	17	19	20	21	22	23	24	26	27	28	29	30	1	3	4	計	総計
天 候	A	☉	○	☉	☉	⊕	⊕	○	☉	○	○	○	○	○	☉	☉	☉	☉	○	☉		
	B	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	☉	○	☉	○	☉	☉	○	○	☉	☉	⊕	☉	○	☉		
	C	⊕	⊕	⊕	☉	⊕	☉	☉	☉	○	☉	☉	○	☉	☉	☉	○	⊕	○	⊕		
気 温	A	25	24	26	26	28	28	27	25	25	24	23	27	26	27	26	28	26	28	28		
	B	29	30	30	30	31	31	28	29	25	27	24	30	30	28	29	31	30	32	30		
	C	30	30	31	28	30	30	29	29	26	27	24	31	29	29	29	31	29	33	28		
アゲハ	A		2	3	9	2			2	1		4	8	1	1	1	1		3	2	40	105
	B	3	1	2	6	1	1					2	2	1	1	2	2		2	2	27	
	C		2	1	8	4	1		1	1	5	1	6		2	3	3		1	1	38	
ジャコウ	A		2		1					1	2		1	2			2	1	3	1	16	41
	B			2						1		2	2	1		1	2	1	1		10	
	C	1	3		1	1					1		1	2	1	2	1	1			15	
ク ロ	A			1						2			1			4					8	32
	B	1			2					2		1	1	2			1	1	1		12	
	C		2			1		1	1	1	2						2		2		12	
ナガサキ	A			1							1										3	19
	B		2			1									3				1	1	7	
	C			1					1					1	2	2			2		9	
モンキ	A										1										1	4
	B					1			2												3	
	C																				0	
アオスジ 計	A										1										1	202
	B																					
	C																					
計		4	14	11	27	11	2	6	6	10	13	10	22	10	9	13	10	10	11	9		

(1) 1978年度における、各アゲハチョウ類の6月13日～7月3日にかけての発生個体数の概要と前回との比較

	1978年	1977年	1976年	1975年	1974年
アゲハ	105	56	163	123	62
ジャコウアゲハ	41	57	63	5	8
クロアゲハ	32	14	61	25	39
ナガサキアゲハ	19	9	41	1	15
モンキアゲハ	4	3	25	13	11
	201	139	353	167	135

(考 察)

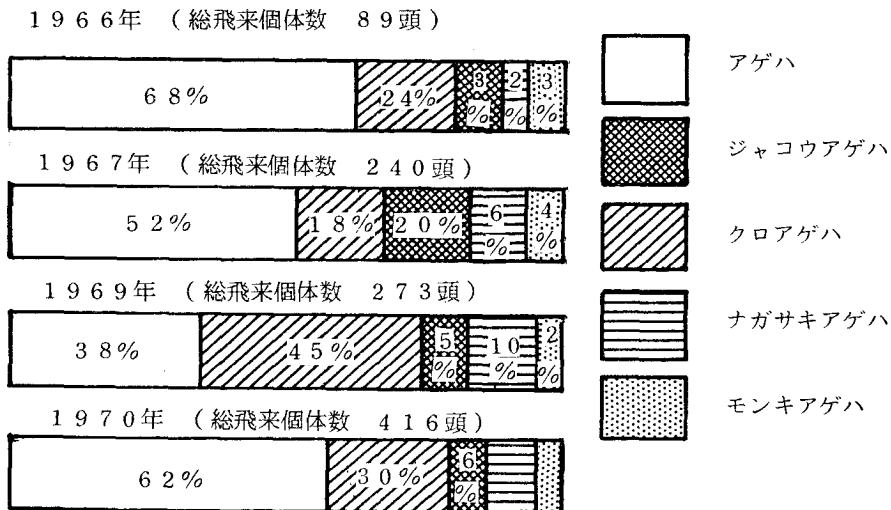
昨年は例年になく暖かったといっても、気温変化を見ると今年は、さらに暖かくなっている。そこで前回と比較してみると、アゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハが約2倍、モンキアゲハは、あまり変わらないが、ジャコウアゲハは、総個体数が増えたにもかかわらず、2割ほど減っている。

総数が増えた原因としては、前回が雨の日が多かったのに対して、今回は2～3日ほどしか降らなかったためではないかと思われる。

また各蝶の分布が、前回はある一部に集中しているが、今年の場合、全体的に飛来して来たことも見てとれる。

(2) 各年度における種類別飛来数の割合

〔表Ⅱ〕



1972年（総飛来個体数 443頭）



1974年（総飛来個体数 135頭）



1975年（総飛来個体数 167頭）



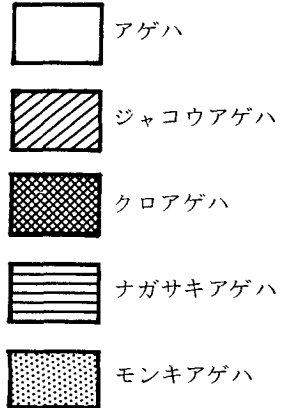
1976年（総飛来個体数 353頭）



1977年（総飛来個体数 139頭）



1978年（総飛来個体数 201頭）



（考 察）

今年は、前回に比べてジャコウアゲハの割合が約 $\frac{1}{2}$ に減少したぐらいで、目立った変動はなく、ちょうど、前々年（1977年）とほぼ同じ形を示している。

具体的に見てみると、最近やや減りつつあったナミアゲハ、クロアゲハが再び増え、ナミ、ジャコウ、クロの各アゲハがいつもの通り全体の約90%をしめている。これに対して、ナガサキアゲハ、モンキアゲハは、例年と変わらず9%、2%と一桁のパーセンテージでつづいている。

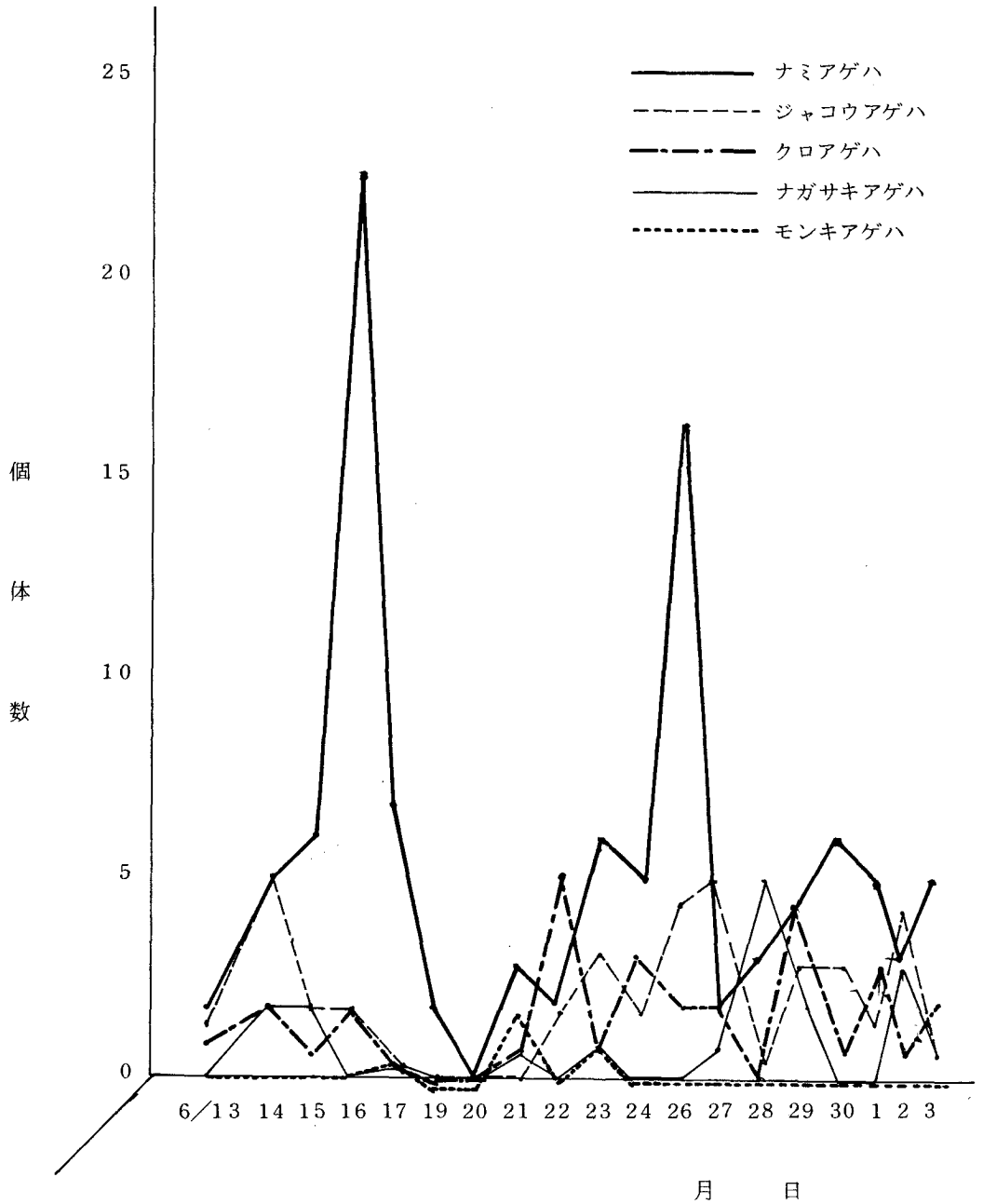
1966年から通して見てみると、1969年と75年を除いてナミアゲハが、約過半数をしめていることがわかる。これは、過去10年間の中でごく自然なことだと思われる。次に特に注目すべきことがある。それはジャコウアゲハの変化である。一番多い時が1969年の45%、一番少ない時がわずか3%とあまりにも差がありすぎる。さらに付け加えるならば、ナミ、ジャコウ両アゲハでいつも約70~80%をしめているが、一方が減れば一方が必ず増えていることである。

また、ナガサキアゲハ、モンキアゲハについては、先に述べたように過去10年間においても、それぞれ、全体的に一番少なく、また大きな変化もなく1桁の割合である。

クロアゲハについては、あえて説明するまでもないが、毎年増えもせず、減りもせず順調に発生していることがわかる。

〔表Ⅲ〕

(3) 日別の各アゲハチョウの飛来数 (1978年度)



〔 考 察 〕

〔表Ⅲ〕の中でまず目につくことは、ナミアゲハの飛来数の変化である。16日と26日が目立って高い数値を示している。この二日間の気温を見てみると、他の日に比べてやや高くなっていることがわかる。天気はどうかというと、16日は曇りがちで、26日は快晴であり、天気に関しては少し違いがある。

次に20日であるが、この日は前の19日からこの日にかけて台風が接近し、雨や風が激しかったために、19日にわずかに二匹飛来しただけである。しかし、小雨やすこしぐらいの風では、晴れた日ほどではないが羽を雨にうたれながらも飛来している。

(4) 飛来個体数の変動について

・時間(A・B・C)における違い

〔表Ⅳ〕

	アゲハ			ジャコウ			クロ			ナガサキ			モンキ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
1966年		32	26		6	13		3	0		1	1		1	2
1967年	32	58	39	5	14	23	3	16	29	4	4	5	3	3	4
1969年	42	39	21	45	31	48	7	5	2	14	9	5	2	2	1
1970年	75	95	86	40	38	47	8	12	4	3	1	1	4	1	0
1972年	73	115	66	23	36	21	6	23	19	9	13	8	7	9	5
1974年	20	24	18	2	3	3	4	14	21	0	7	8	4	3	4
1975年	22	62	39	5	0	0	5	11	9	1	0	0	2	4	7
1976年	49	81	33	28	19	16	11	20	30	11	17	13	2	11	12
1977年	23	22	11	20	10	27	6	5	3	4	3	2	0	1	2
1978年	40	27	38	16	10	15	8	12	12	3	7	9	1	3	0

(ただし、1966年の観察期間は12日で、それに朝の観察Aは実施されていない)

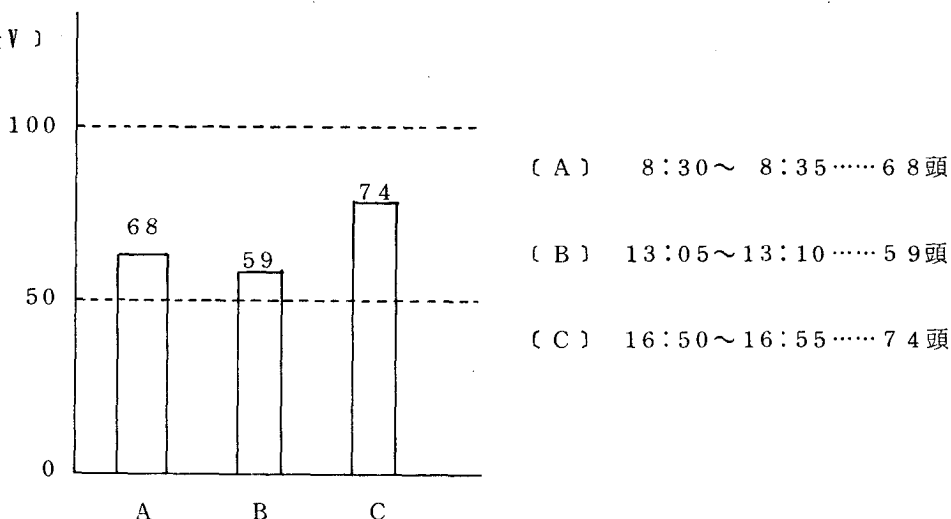
〔 考 察 〕

1. ナミアゲハ、ジャコウアゲハはそれぞれ(40, 27, 38), (16, 10, 15)とAを最高としてほぼ同じ割合で、C、Bと続いている。これを過去10年間について見てみると、ナミアゲハについては、Bが最高で次にだいたい同じぐらいでAとCが並んでいるが、このあたりが今年のナミアゲハにおける特徴のようである。ジャコウアゲハも、ナミアゲハほどではないがほぼ同じことが言える。
2. クロアゲハ、ナガサキアゲハ、モンキアゲハについては、前回、前々回と比べてみても、そうたいした差はなく、過去10年間においてもあまり大きな変動はない。

3. またナミアゲハは、例年の正午の数時間における活動が活発なのに対して、先も触れたように午前と午後の活動が活発になっている。

ジャコウアゲハは、今回、例年とも午前中の活動が活発である。これに対して、クロアゲハ、ナガサキアゲハは、午後の活動が活発である。モンキアゲハは、この点に関してはこれという特徴はない。

(表Ⅴ)



〔 考 察 〕

今年は、暖かったせいか午前中から飛来する蝶の数は増え、一日中通して見てもほとんど変わらない。ちなみに、今回と同じように暖かった昨年の結果(A……53頭、B……41頭、C……45頭)を見てみても、やはり午前中からの飛来が多い。これは、一昨年の結果(〔まのせ〕第13号、P12)と比べて、大変異なる点であり、注目すべき点でもある。この原因を調べてみると、やはり気温の変化であると思われる。

気温のわりあい低い年では、まだ気温の上がり切れない朝の観察時には活動も不活発で、やっと暖かくなり始めた午前中から正午、夕方前にかけて、活動が著しい。これとは逆に、夕方の観察時には再び気温が下がり、活動も不活発になるわけである。

(5) 各アゲハチョウの飛来による発生時期

これは飛来数が気象(特に気温)の影響をかなり受けているので、これだけの資料から発生時期を決めるとなると、非常に難しく、また危険である。しかし、あえて言うならば、〔表Ⅰ〕から、だいたい6月上旬から8月中旬ごろまでだろうと思われるが、これはただの推測にすぎず、絶対ではない。

また、その年の気温の状態によって個体数が大きく変わることもいえる。20度から25度の間でほしい経過している年は、発生個体数も多いが、逆に25度から30度の年は少なくなっている。やはり個体発生の最適の気温というはあるようである。

〔 反 省 〕

6月13日から7月3日まで約20日間、1年の東さん、福元さん、久保さんの助けを得ながら、1日3回朝昼夕の5分間ずつ観察してきたが、時間帯が時間帯だけにめんどくさい面もあったが、一応結果が出たことは、喜びである。しかし、記録ミスや、観測ミスがなかったとはいえない。

今年は、この観察を始めてから10年目で一つの節ができた。これも先輩の方々の努力のおかげである。そこで今回は、今までのデータをもとにして少し詳しくまとめてみた。詳しくまとめたといっても、今までの結果に付け加えただけであり、もう少し努力が必要だとつくづく感じた。

それから少し残念なことがある。この調査の対象である大切なネムの木が、学校側の都合により枝が $\frac{1}{2}$ 程、切り落とされたことである。これによって、来年からの結果がこれまでと変わるのは必至である。

この調査は、ここだけでなくもっと場所を増やしたら、発生状況や発生時期など、さらに詳しくわかるのではないかと思う。これからもこの調査だけは続けてもらいたい。

1977年 春の甲虫

2年 中田悦朗

1977年春に、採集した甲虫を記す。

4月20日 カミキリムシ科 ツマグロハナカマキリ 1頭 加世田高校内 (EN)
ジョウカイギン科 セボシジョウカイ 1頭 加世田高校前の堤防 (EN)

4月24日 コガネムシ科 ヒメハナムグリ 1頭 笠沙町赤生木・松木場(TO)

5月 8日 コガネムシ科 ヒメハナムグリ 7頭(普通) 1頭(黒色) (TO)
ジュウシチハナムグリ 1♂1♀(普通) 1♂(赤色) (TO)
コアオハナムグリ 1頭 (TO)

ハムシ科 ヨモギハムシ 1♂1♀ (TO)

ハンミョウ科 ニワハンミョウ 1頭 (TO)

ゾウムシ科 アオゾウムシ 1頭 (TO)

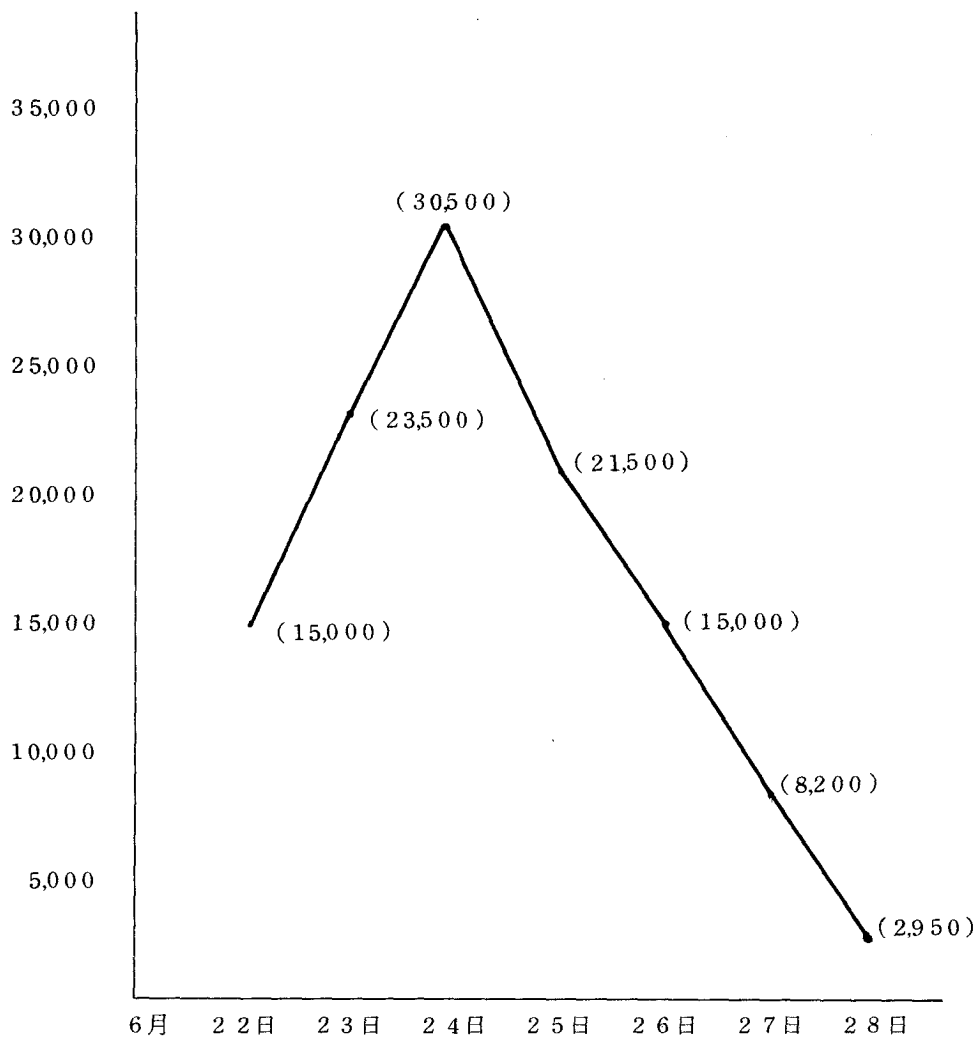
シロコブゾウムシ 1頭 (TO)

上はいずれも、笠沙町赤生木・松木場～市崎木場で採集

1978年ネムの木の落花数調べ

2年 木村 俊

この調査は今回で7回目である。今年は台風がきたせいか、極端に落花数の多い日がみられる。また、調査期間が、短い期間にとどまってしまうました。申しわけありませんです。



1977年 4月29日(Fri) 晴れ

亀ヶ丘採集会

2年 中田悦朗

・参加者

3年 岐島重喜 大迫達洋 末永俊英 森 美他 上山俊哉 坂口末男
2年 石井浄浩 清川達己 鳥飼英俊 部外者(新聞部)2名
1年 中田悦朗 黒葛俊弘

・コース

加世田駅発(8:50)～バス～大浦着(9:20)～荷物の点検～大浦発(9:25)～徒歩～
登山口着(10:00)～休憩～登山口発(10:15)～徒歩～山頂到着(11:40)・昼食
と採集・下山(12:50)～徒歩～登山口着(1:55)～荷物の点検～登山口発(2:00)
～徒歩～大浦着(2:30)

1 紀 行

1977年度の最初の採集会である。例年1年生の入部歓迎の目的を含んで行なわれるそうであるが、今年は、1年生は男子が2人となんとも淋しい。各自大浦に集合することになっていた。加世田方面からバスで集合したのが8人、単車で集合したのが4人、このうちの2人は、荷物運びのために山頂までそのまま単車で行くことになっていた。また大迫さんだけは、地元なので徒歩でやってきた。天候は文句なしの晴天。少し暑いくらいだった。参加者は、部外者も含めて男子のみ13人。男ばかりだったが、かえて気が楽だったかもしれない。

荷物の点検を済ませ、各自、捕虫網、三角カン、カンビン、胴乱、その他もろもろの道具を持って出発。4月とはいえ、いざ歩き出すとなんとも暑く、じっとりと汗ばんでしまうくらいだった。空は青く、トンビが2羽舞っている。そうかと思えば水田ぎりぎりの低空をツバメが飛びかっている。途中やや遠くに磯間嶽も見えていた。10時ちょうど、ようやく登山道入口である。出発してから結構長く感じられたが、そんなに時間はたっていない。立て札に「山頂まで3km」と書かれてあった。ここで、近くの店から買って来たジュースとアイスクリームでひと休み。しばらくしてまた出発。今までは、ほとんど田んぼ道を通ってきたので、ずいぶん暑かったが、山道にはいっていくにつれて、除々に影も多くなり、いくぶんかは涼しく、また空気も澄んでいるように感じられた。しかしそれでも暑いのだが、なんとかみんな採集を進めていった。中腹に清水があって、みんなそれを飲んでた。さすがに冷たく、気持ちよかった。あたりにはハルセミが鳴いていた。そこからはいる近道があって、ほとんどの人はそこから進んでいった。僕と上山さんだけは、普通の道から行ったのだが、近道の出口でみんなと合ったのは、僕たちとほぼ同じくらいだった。そこらあたりになると、いくらか高地のせいかウグイスがあちこちでさ

えずっていた。また同様にホホジロも澄んだ声でさえずっていたが、かと思うと、近くの林ではヒヨドリが、かん高いけたたましい声で、わめいていた。少し進んで山頂付近になると、牛が放牧されており、のんびりと寝ころがっていた。なんとものどかな風景だった。いよいよ山頂、なんとなくみんな、ぐったりしているようだった。そこにあった店からジュースを買ってきて、早速山頂にある高見台で昼食。さすがに回りのながめはすばらしく、海の水平線はあまりに遠くのせいかぼんやりとしている。また野間岳、長屋山、磯間嶽、そして遠くに開聞岳も見えていた。僕自身、ここに来たのは始めてではなかったが、何度来てもその感動は、最初のとときと少しも変わらないように思えた。昼食後、しばらく採集をしたり、のんびりしたりした後、記念撮影をしてから下山した。部員全員けがもなく、楽しい1日だった。

2 調査記録

(1) 蝶類

イチモンジセセリ(1頭)、ヤマトシジミ(+), コミスジ(), ジャコンアゲハ(1頭) モンシロチョウ(), ヒメウラナミジャノメ(), ナガサキアゲハ(), モンキアゲハ(+), アサギマダラ(2♀), アゲハモドキ(1頭), アオスジアゲハ(+), ツマグロヒョーモン(), ツマベニチョウ(2♂), イシガケチョウ(1頭), サツマシジミ(2♂) アゲハ(), イチモンジチョウ(1頭), クロセセリ(1頭), ムラサキシジミ(1♀), クロアゲハ(1♀), ヒメジャノメ(2頭), ミヤマカラスアゲハ(1♂), ヤクシマルシジミ(1♂), キアゲハ(1頭), ゴマダラチョウ(1頭), オオトモエ(1頭)

(2) 甲虫類

タマムシ科	ルリナカボソタマムシ(ニホンナカボソタマムシ)	1頭採集(TO)
コガネムシ科	ヒメハナムグリ	1頭採集(EN)
	チャイロハナムグリ	1頭採集(TO)
	ヒラタハナムグリ	1頭採集(TO)
ハンミョウ科	ハンミョウ	1頭採集(EN)
	ニワハンミョウ	1頭目撃(TO)
オサムシ科	オオオサムシ	1頭採集(TO)
ホタル科	オオオバボタル	1頭採集(TO)
ハムシ科	ホタルハムシ	沢山目撃
コメツキ科	トビイロクシコメツキ	1頭採集(TO)
カミキリ科	ツマグロハナカミキリ	沢山目撃(EN)

(3) 蜘蛛類(個体数の多少は記録せず)

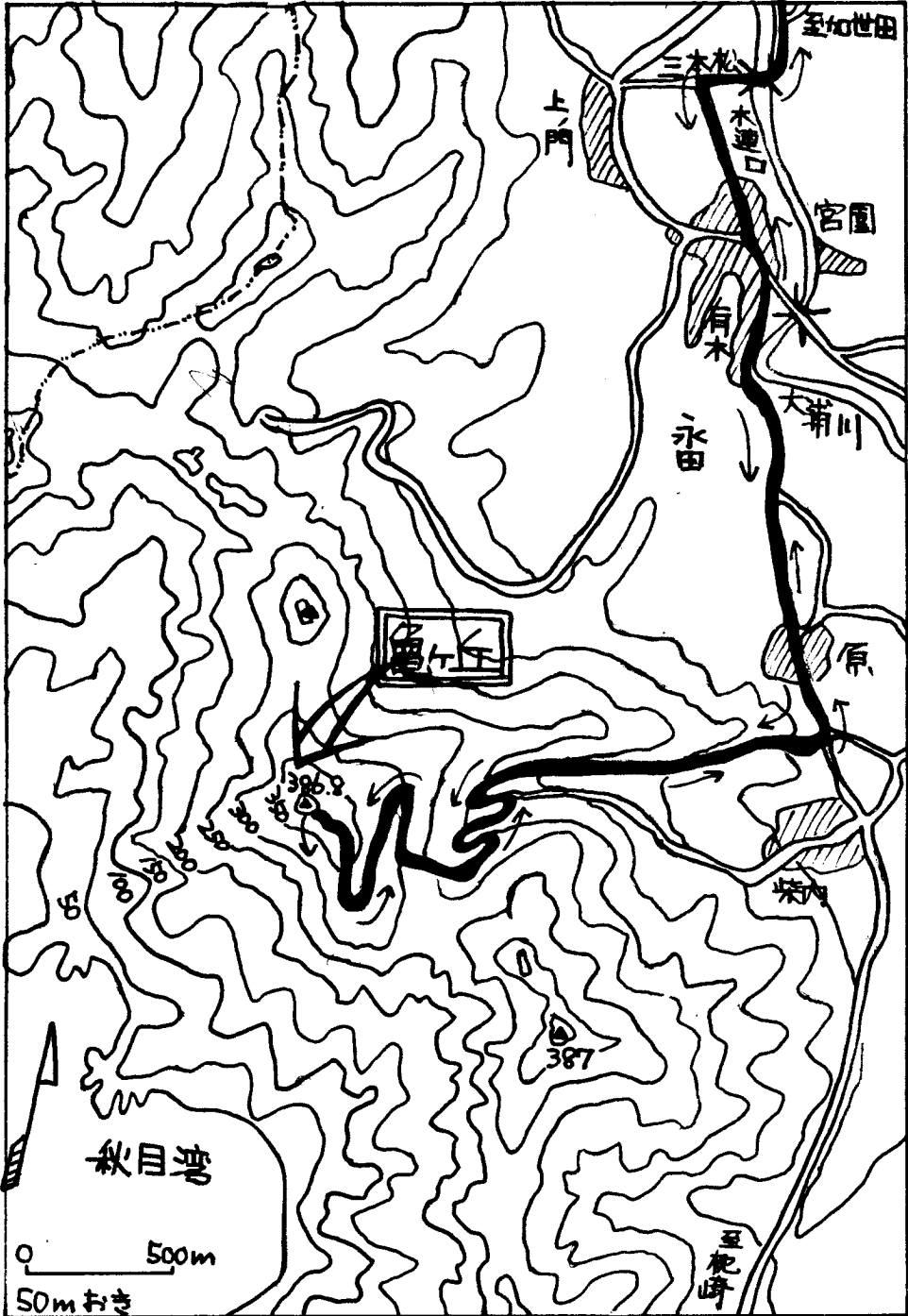
アシナガゲモ科 チュウガタシロカネゲモ

コガネグモ科 オニグモ, チュウガタコガネグモ

ハエトリグモ科 アリグモ

コサラグモ科 ニセアカネグモ

タナグモ科 コクサグモ



1977年 10月10日

サソリモドキ採集記

鮫島重喜

・参加者

鮫島重喜 大迫達洋

・コース

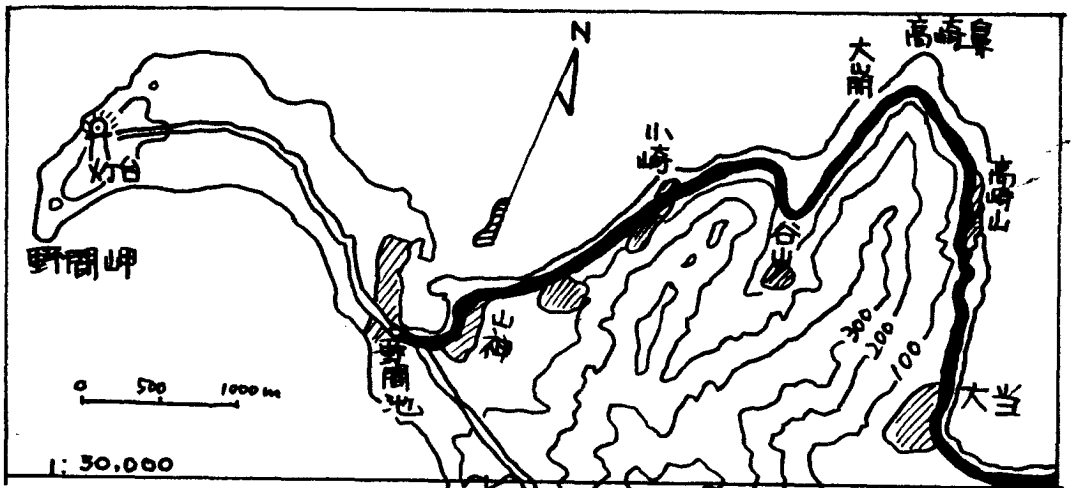
万世発(10:00)～バス～野間池着(11:00)～採集～野間池発(17:30)～バス～万世着(18:30)

大迫と僕の2人は、文化祭に展示するサソリモドキを採集するために、野間池へと行った。サソリモドキについては、前号(13号)に記載してあるので、ここでは省くことにする。

この日は晴れて、天気は文句なしのいい日だったが、少し風が強かったぐらいだった。気温の方もちょうどいい感じだった。最初、夕日ヶ丘へと向った。サソリモドキは、よく石やブロックの下にいてるので、いくつもの石などの下を見たがよく見つからない。すると道路の側溝の下に一匹を発見した。さすがにうれしかったが、もうすでに死んでいた。

少しまた行くと、土手の石の下に一匹、前のとするとだいぶ大きいのを見つけて、採集しようとする。あの酢の匂いが鼻をついた。しかし、それにも負けずピンセットでシャーレの中へ入れた。そろそろ12時が過ぎたので、下の食堂で昼食をとって、ひと休みしてから、こんどは中学校へと行ってみることにした。ここではブロックの下とか石の下で、大小8匹を採集することに成功した。途中1匹を取り逃がしてしまい、地中へと逃げてしまった。

1日中かけずり回ってやっと9匹を採集できてよかった。始めのうちは、1匹も捕えられないかと思って不安だったが、何とかやり遂げられて明日、部員の皆にも顔を合わせることができるようである。



1978年 4月30日 (SUN) 晴れ

塘池採集会

2年 中堂蘭 さとみ

○参加者

3年……小田裕徳，鳥飼英俊，清川達己

2年……中田悦郎，黒葛俊弘，木村 俊，川原浩二，大坂あけみ，中堂蘭さとみ

顧問……里俊広先生

その他，先生の子供2人

○9時学校に集合。捕虫網，胴乱，プランクトンネットなどを準備して，9時35分に，学校を出発した。私は，初めての採集会でもあったし，最初のうちはとてもはりきっていた。

塘池までは，およそ6kmくらいで，そこを歩いて行かなければならなかったのて，やはりとてもきつかった。私たちは場所を知らなかったし，聞くところによれば，“すぐ近くだ”ということで，歩き始めたころは，速かった足どりも，時間がたつにつれて，ペースは落ち，口からは，“まだ？”と，この言葉が連発だった。けど，小学生の先生の子供さんもがんばってたし，置いていかれたら大変ノと，必死でがんばったのです。

歩きながら，チョウを追っかけたり，いろいろな，コン虫をつかまえたりで，あっちこっちしてたせいか，だいぶ時間がかかったようだ。

途中，舞敷野という部落で，休憩することになり，みんな，ホッノとしていると，先生が，みんなに，コーラなどをおごってくださいました。おかげで，だーいぶ，元気が出て，10分くらいしたら，また，はりきって出発したのです。「ここを過ぎたら，あとはもう近い。」との，だれかさんの言葉を信じて，ひたすら歩き続けたのです。

小田さんは，いろいろと写真を撮っていました。黒葛君は必死で，蝶などを追いかけながら，メモをしていたようです。他の人は，捕虫網を持って，蝶取りでした。なれない私たちは，すぐに逃げられてしまったり，つかまえても，またすぐのがしてあげたりで，ちっとも採集した数はふえませんでした。そんなことをしながら歩いていると，「この坂を下った所が，塘池だぞ」と言われて，もう，蝶どころじゃなくなり，今までふらつき気味の足どりが，なぜか急に急ぎ足になったのがおかしかった。

着いたとたん，みんな，芝の上にすわりこんで，「だれた〜。」と，連発していた。歩くのは，きつかったけど，着いて初めて，“来てよかったノ”と思った。9時35分に学校を出発し，着いたのは，11時35分。2時間歩いたことになる。

景色を見ながら，お昼を食べて，しばらくしてから，プランクトンの採集を始めた。ボートを三台貸りて，そのうちの一台に，プランクトンネットをつけて，池を1周した。そして，集められた水は，フラスコに移し，そして，また採集した。

フラスコに集められた水は、うす茶っぽく濁っていて、とてもきたならしかった。先生は、「濁っているのは、プランクトンがそれだけたくさん、この中にいるということだ。」とおっしゃっていました。なるほど、空にすかして見たら、何となく、小さな生物が、うじゃうじゃと、活動してるようでした。気持ち悪いほどに……。

プランクトン採集が終わると、貸りてきた三台のボートに、3人くらいずつのり、しばらくはそれで遊んでいました。そのあと、記念に、みんなと写真をとって、あとは何もすることはなかったのので、「そろそろ帰ろうかー。」ということになり、いろいろと帰る準備をした。

2時間かけて、歩いて来た道を、また歩いて行かなければいけないのか…。と考えると、それだけでも、疲れてしまいそうな気がした。みんなも、そうらしく、“あ〜あ！”という顔をしていました。と、そんな時、先生が、「タクシーで帰ろうか。」と言って、お店の電話を貸りて、タクシーを呼んだのです。タクシーはすぐに来た。みんなの荷物や、採集用の道具など、トランクにつめて、2台のタクシーに分乗して、3時のころ塘池を出た。鳥飼さんは、オートバイに乗って、私達とは反対の方向に、帰って行きました。

学校に着いたのは3時15分。はあはあ言って2時間かけて歩いた道を、ほんの15分足らずで帰ってきてしまったのです。こんなことでいいのかしら〜!?と、思わないでもなかったけれど、それでも、やはり、とても助かったのです。もう歩くのはいやだったし……。

学校に着くと、すぐに、採集した水の中に先生は、ホルマリンを入れたのです。きょうは、もう観察はできないし、このままほうっておくと、くされるから。ということにしいのです。

道具を一応かたづけて、カギをして、そして、みんな帰って行ったのです。(重そーな足を引きずりながら……??)

疲れた1日ではあったけど、やはり、参加してよかったなあ、と、とても思った。いい思い出になることでしょう。あす、学校へ行き、プランクトンを顕微鏡で見るのが楽しみです。

調 査 記 録

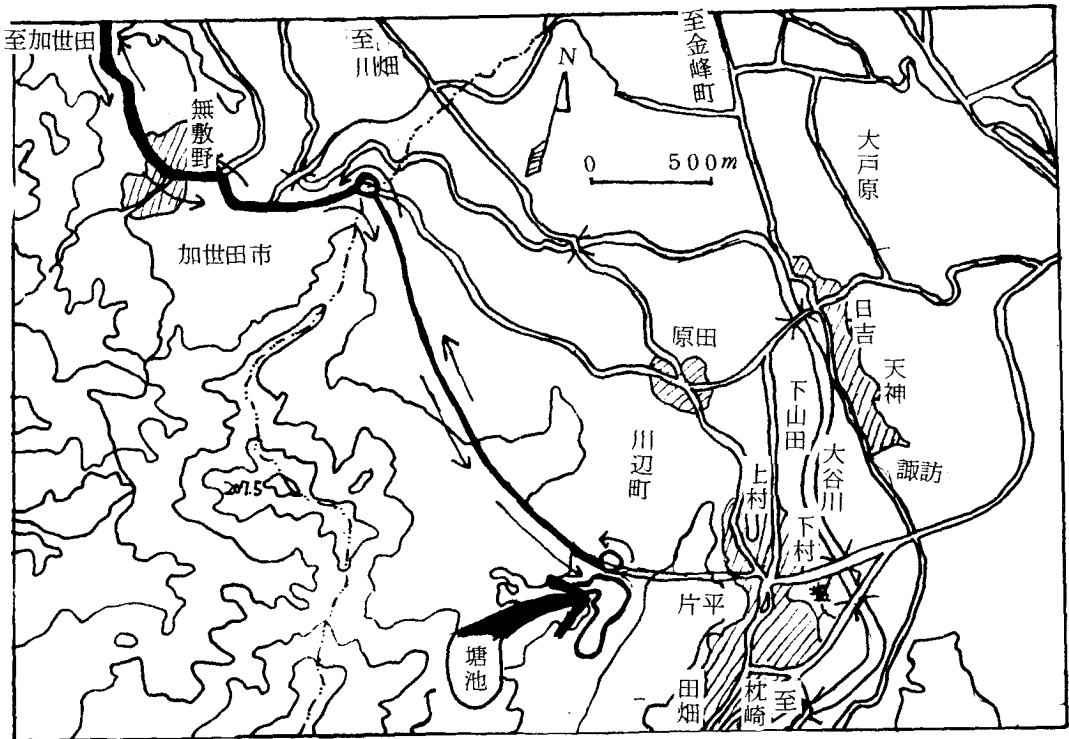
(1) 蝶 類

	(加世田市)	(川辺町)
ナガサキアゲハ	2頭	
モンシロチョウ	7頭	1頭
モンキチョウ	1頭	1頭
ジャコウアゲハ	10頭	5頭
タイワントツバメシジミ	3頭	1頭
カラスアゲハ	3頭	1頭
コムスジ	4頭	
アオスジアゲハ	2頭	
ヒメウラナミジャノメ	3頭	

	(加世田市)	(川辺町)
モンキアゲハ	1頭	1頭
ツマグロヒョーモン		4頭
ナミアゲハ		2頭
ウラナミアカシジミ		1頭

(2) プランクトン類

別ページに記載



南薩西部のツマベニチョウ

3年 大迫達洋

ツマベニチョウが南薩から初めて報告されたのは1950年で、最初の記録は指宿郡山川町からであった。その後笠沙・坊津町からも報告され、現在まで30年近くの間には相当数が目撃・採集されているようである。

南薩西部(特に坊津町秋目・笠沙町大当付近)の調査は我校の先輩方によってなされ、その記録も「まのせ」誌上に多く発表されている。筆者は南薩西部でも先輩方によってあまり調査されていない大浦町及び笠沙町赤生木などで主に採集・観察をし、その一部は本誌13号に発表したが、まだ未発表の記録も割とあるので、それらの記録を発表すると同時に現在までの南薩西部のツマベニチョウの記録をまとめようと思った次第である。

しかし、いざまとめるとなるとわからないことばかりだということを痛感した。飼育も完成させていない私にとってはあたりまえである。今後、南薩西部で調査をされる方々に期待し、本報がいくらかでも参考になってくれればと願う。

I 採集・目撃記録

本記録は南薩西部で採集・目撃されたツマベニチョウの記録である。尚、ここでは南薩西部とは川辺郡笠沙町、同大浦町、同坊津町、枕崎市、加世田市を言うことにする。

各データは月・日・年、個体数、採集目撃地、採集目撃者の順で示した。尚、記録を簡略化するため次のようにした。

- 個体数：卵・前蛹・蛹はそのまま、幼虫は幼とし、各齢数もその数字及び若だけを幼の前に付した。成虫の記録は成虫の別は記さずに単に1匹[※]或いは1頭のように記した。大ざっぱな目撃記録は今まで本誌で用いた通り、井=多数・[・]=普通・+=少数とした。また、目撃・採集の別がわかるように各記録の後には目撃或いは採集と書いた。 ※若とは1齢～3齢のことである。

例 卵十目撃、3幼1・5幼1・1♀採集=卵を数個目撃、3齢幼虫1匹採集、終齢幼虫1匹採集、成虫1♀採集

- 採集・目撃地：部落名かそれに準ずるものだけを記した。それらの所在市町は下記の通り。尚、広範囲にわたるものは記録のままを記した。
 - 野間池、大崩、高崎山、大当、片浦、仁王崎、野間岳、椎木、札内、姥、黒瀬、唐浦、平瀬、松木場、市崎木場……笠沙町(但し、唐浦、平瀬は坊津町境付近。)
 - 越路、福元、有木、長屋山、大木場、亀ヶ丘、柴内、かした山、磯間嶽(大)、磯間嶽(仲)……大浦町(磯間嶽(大)とは大木場側山麓のこと、同(仲)は仲組側山麓のこと。)
 - 秋目、今岳、久志、山口、博多浦、平原、鉦迫、泊、坊、上ノ坊……坊津町
 - 鹿鹿籠宇都……枕崎市 ○小湊、校内……加世田市(校内は加世田高校内のこと)

○ 採集・目撃者：未発表の記録は採集・目撃者を記したが、発表済の記録は文献番号を()
 にくって記した。文献番号は稿末の参考文献参照。

2・	1・1976	若幼20余目撃	松木場	(31)
	1・1976	若幼1目撃	市崎木場	"
3・	9・1976	若幼16目撃	松木場	"
	13・1978	若幼5目撃	市崎木場	大迫達洋
	21・1976	幼17目撃, 幼死骸3	松木場	(31)
4・	20・1969	1♂採集	秋目	(17)
	24・1977	1♀目撃	松木場	大迫達洋
	25・1976	蛹2目撃うち1採集	"	(31)
	29・1973	1♂採集	磯間嶽(仲)	大迫達洋
	29・1977	2頭目撃	亀ヶ丘	"
5・	2・1971	井目撃うち4♂採集	秋目	(26)
	2・1976	蛹1採集	松木場	(31)
	3・1964	3頭目撃	秋目	
	3・1968	3頭目撃うち1♀採集	久志	(15)
	8・1977	1頭目撃	小湊	大迫達洋
	8・1977	2♂目撃	松木場	"
	9・1971	井目撃うち5♂採集, 卵1採集	秋目	(26)
	9・1971	1♂目撃	今岳	"
	9・1971	1♀採集他にも目撃	大当	"
	9・1976	3♂目撃	亀ヶ丘	(32)
	9・1976	1♂目撃	長屋山	大迫達洋
	18・1975	2♂目撃	かした山	"
	24・1975	1♂目撃	長屋山	"
	25・1971	2♂1♀・2幼2・卵2採集	秋目	(26)
	25・1975	1♂目撃	長屋山	大迫達洋
	27・1975	10目撃	磯間嶽	"
	27・1976	1♂目撃	長屋山	"
	28・1967	1♂目撃	七ノ坊	(7)
	30・1971	4♂目撃	久志	(26)
6・	4・1972	♂10目撃, 幼井うち4・卵2採集	秋目	(28)
	7・1970	4♂採集	"	(25)
	14・1972	幼3採集	"	(28)

19・1971	卵2採集	秋目	(26)
19・1977	1頭目撃	唐浦	大迫達洋
27・1976	幼2目撃	松木場	(31)
27・1976	幼2目撃	市崎木場	"
7・4・1971	2♂目撃	秋目	(26)
7・1963	♂2回目撃	枕崎～坊	(34)
7・1976	幼10目撃	松木場	(31)
13・1969	1♂・卵6・1幼6採集	秋目	(20)
14・1970	1頭目撃	校内	(24)
16・1967	目撃	秋目	(6)
17・1976	幼10目撃	市崎木場	(31)
30・1976	1頭目撃	長屋山	大迫達洋
30・1976	2♂1♀目撃	磯間嶽(大)	"
8・1・1959	1♂採集	東鹿籠宇都	(33)
1・1960	1♂1♀採集	大当	"
2・1959	1♂採集	坊	"
3・1968	卵1採集	久志	(15)
4・1969	1♀・卵2目撃	秋目	(18)
4・1969	卵4目撃うち1採集	有木	"
4・1973	2♀採集	市崎木場	大迫達洋
9・1969	1♀・5幼1・3幼1採集, 卵目撃	秋目	(19)
10・1971	うち1♂採集	"	(26)
10・1973	成虫目撃	大浦～野間池	(35)
11・1967	目撃	秋目	(11)
11・1968	2頭・蛹2・1幼17・卵10採集	"	(16)
11・1971	3頭目撃うち1♂採集	"	(26)
12・1967	井目撃うち1♀・5幼1・3幼1採集	"	(6)
12・1968	1頭目撃, 幼10数匹・卵10数個採集	"	(16)
14・1960	1♀採集	坊	(33)
16・1970	1♂目撃	秋目	(24)
16・1976	1♂・幼10目撃	松木場	(31)
16・1976	1♂採集, 幼10目撃	市崎木場	"
22・1961	1♂目撃	泊	(33)
22・1976	10目撃	高崎山	大迫達洋
28・1977	2頭目撃	市崎木場	"

	31・1960	1♂採集	鉦戸	(33)
9・	5・1976	1♀採集	松木場	(31)
	5・1976	1♀目撃	長屋山	大迫達洋
	10・1967	5幼1・4幼1採集	秋目	(8)
	13・1970	5頭目撃	"	(24)
	15・1967	2♂目撃, 2幼1採集	"	(9)
	15・1971	1♂目撃	"	(26)
	15・1972	成虫目撃(詳細不明)	平瀬	(27)
	15・1977	1♂目撃	越路	大迫達洋
	16・1973	幼目撃	市崎木場	"
	17・1972	1♂目撃	札内	"
	19・1976	1♂目撃	亀ヶ丘	"
	24・1967	4♂目撃うち1♂採集	秋目	(6)
	24・1973	十目撃	高崎山	大迫達洋
	24・1973	1♀採集	大崩	地村剛
	24・1975	十目撃	高崎山	大迫達洋
	下旬・1971	3幼1採集	大当	(26)
10・	3・1971	蛹1・3幼2採集	秋目	"
	6・1977	1♂採集	松木場	大迫テル
	9・1960	1♀採集	平原	(33)
	10・1960	3♂目撃うち1♂採集	山口	"
	10・1960	2♂目撃	博多浦	"
	10・1966	1頭採集	仁王崎	(5)
	10・1967	1♂目撃	有木	(12)
	10・1970	幼4採集	大当	(23)
	10・1975	1♂目撃	椎木	大迫達洋
	11・1960	2♂採集	平原	(33)
	11・1960	1♂数回目撃	泊~平原	"
	12・1975	2♂1♀目撃	福元	大迫達洋
	17・1976	3♂・幼4目撃	松木場	(31)
	17・1976	蛹3採集, 幼5~6目撃	市崎木場	"
	19・1964	1♂目撃	野間丘山頂	()
	20・1968	1頭目撃	大当	(14)
	21・1967	1♂採集	有木	(12)
	22・1967	4♂・5幼1・幼3採集	大当	(13)

22・1977	1♀採集	松木場	大迫テル
25・1964	1♂目撃	片浦上山	()
26・1975	1♂1♀目撃	亀ヶ丘	大迫達洋
26・1975	1♀採集	柴内	〃
26・1975	3♂目撃	大木場	〃
31・1976	十目撃	姥	(29)
11・2・1969	2頭目撃	大浦～野間池	(21)
2・1975	卵井目撃	松木場	(31)
3・1976	目撃	唐浦	(32)
3・1976	十目撃(〔3P〕の井は間違い)	黒瀬	〃
12・30・1975	若幼20余目撃	松木場	(31)
30・1976	蛹2・前蛹1・5幼1・若幼7目撃, 幼虫死骸3〃		〃

今までの記録をなるべく全部、示そうと思ったが、目を通したのは「まのせ」全号と「鹿児島県の蝶類」「鹿児島県の蝶の生活」及びSATSUMA65号～75号で「鹿児島県の蝶類」以後～64号までのSATSUMA誌上に南薩西部のツマベニチョウの記録が発表されていたら、それはここには記していないし、また、「鹿児島県の蝶類」の中でも秋目・今岳・久志・〔175〕、笠沙町(75)(175)の記録は記していない。尚、〔12〕及び〔18〕の記録の本文は大浦だったのを「まのせ7号」P42の文から推測して有木とした。

Ⅱ 分 布

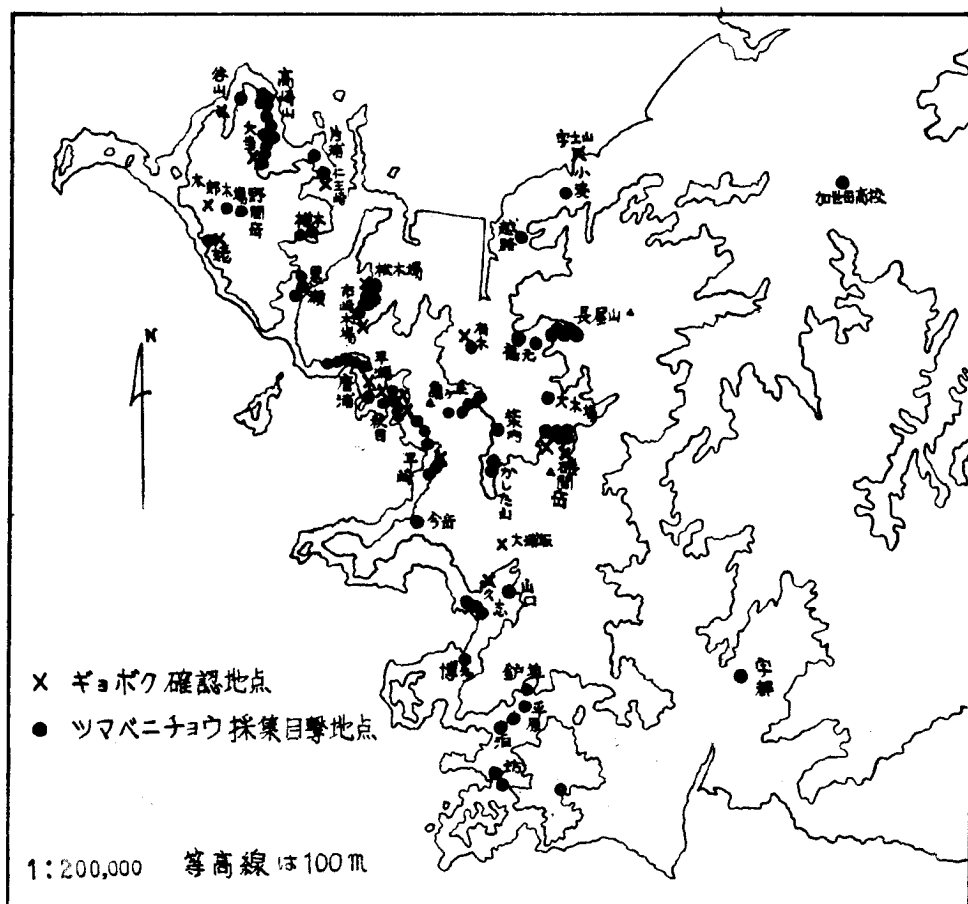
まず、ツマベニチョウの食草ギョボクが確認されている地点は下記の通りである。

- 笠沙町 谷山(「鹿児島県の蝶類」と「まのせ4号」に報告されているが、同一のものか不明)
 大当(「まのせ5号・6号・8号・9号」より)
 太郎木場(「鹿児島県の蝶類」より)
 姥(筆者が1972年に確認。大きいのが2～3本)
 仁王崎(玉林中横の小川)(「まのせ7号」より)
 松木場“えらんひら”(「まのせ13号」より)
 市崎木場(「まのせ13号」より)
 平瀬付近(「まのせ6号」の秋目調査会の地図のA地点)
- 大浦町 有木(「まのせ5号・7号」より。本文では単に大浦だけであったが「まのせ6号」磯間嶽(仲組山麓)(「まのせ13号」より) P8の地図より推定した。
 〃(大木場山麓)(「まのせ13号」より)
 大浦坂(「まのせ6号」より)
- 坊津町 秋目 2ヶ所 (「まのせ5号・6号・7号・8号・9号・10号」より)
 秋目～平崎間 2ヶ所 (「まのせ6号」より)、久志 (「まのせ3号」より)
- 加世田市 小湊 宇土山 (夏越悦郎君が確認。本数不明)

ギョボクが確認されているのは現在、上記の18ヶ所であるが、笠沙町の谷山～大当間（途中、大崩・高崎山がある）、椎木付近（野間岳山麓）、黒瀬付近、太郎木場～唐浦間、大浦町の長屋山山麓（福元側）、亀ヶ丘山麓（柴内・原・上ノ門のどの側でも）、大木場付近、柴内～大浦坂間（途中、かした山がある）、坊津町の唐浦～秋目～今岳～久志～博多～泊～坊間、久志～大浦、坂間、泊～針迫間などの成虫の記録も偶産的には思えないので、調査すればギョボクが発見出来ると思う。

また、加世田市加世田高校の記録は偶産的なものと思うが、枕崎市東鹿籠宇都の記録はわからない。坊～枕崎間の調査が必要である。記録は残っていないが加世田市上津貫や干河でも成虫を目撃したということを知ったことがある。上津貫から磯間嶽の加世田市側を通して久志までの間は調査すれば発見出来るような気がする。

薩摩半島では南薩西部以外に指宿市、揖宿郡山川町・開聞町、鹿児島市、日置郡伊集院町、姶良郡姶良町、川内市で記録されているようである。



図：南薩西部のツマベニチャウとギョボクの分布

Ⅳ 生態

♂は周知の通り、小川の流れている谷間の樹林上を大きなスケールで飛び、遠くからでも目につき易いが、♀はほとんど食樹の近くで発見出来るため、それが薄暗い樹林内であることも少なくない。訪花することも多いが今までに記録されている植物は下記の通り。

クチナシ(白)(5月)市崎木場・秋目・久志, ネム(桃)(6月)磯間嶽(仲), ユリ(色不明)(7月)秋目, クサギ(赤白)(秋)大崩・亀ヶ丘, サルビア(赤)(10月)松木場, ソバ(白)(10月)山口, アザミ(桃)(秋)久志, ヒギリ(赤)久志, ルコウソウ(赤)久志, ブッソウゲ(赤)(夏)市崎木場

♂には吸水性が認められるが、記録は次の通り。

1977・5・8(松木場)1♂, 1976・5・9(長屋山)1♂, 1976・5・27(長屋山)1♂, 1960・10・10(博多浦)1♂

産卵は何度か目撃したが、他の文献と変わったところはないようである。交尾はまだ記録がないようである。♂には占有性があるようだが、はっきりしたことは不明。

参考文献

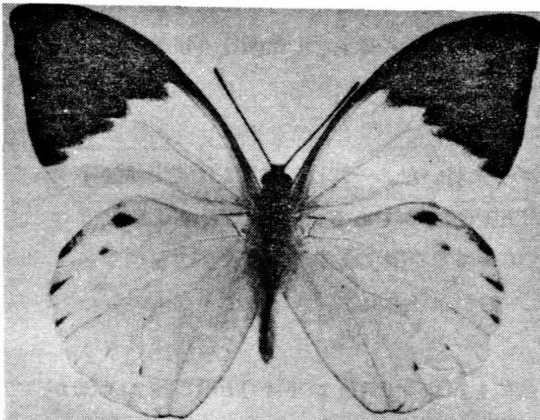
- 1 2号
- 2 "
- 3 "
- 4 3号(P55~60)久志採集会 赤崎慶子・田中基行・竹ノ内慶子・吉元成子
- 5 4号(P18~20)野間半島採集記 大原賢二・染川勝夫・五田健
- 6 5号(P28)秋目のツマベニチョウ(1967)(Ⅰ) 出来和法
- 7 " (P29~30)久志~坊ノ津採集会 立石俊子
- 8 " (P30)秋目のツマベニチョウ(1967)(Ⅱ) 大原賢二
- 9 " (P37)秋目のツマベニチョウ(1967)(Ⅲ) 大原賢二
- 10 " (P39)大浦のギョボクとキジョラン 大原賢二
- 11 " (P40~48)秋目調査会(1967) 参加部員
- 12 " (P66~67)大浦のタテハモドキ(1967) 大原賢二・田元和美・出来和法
- 13 " (P68~70)笠沙路を歩く 染川勝夫 染川勝美
- 14 6号(P7~9)大当採集記 平川忠久
- 15 " (P23)久志~坊(1968) 平川忠久
- 16 " (P26~35)秋目調査会(1968) 参加部員
- 17 7号(P14)ツマベニチョウを求めて(Ⅰ) 田中洋海
- 18 " (P21)ツマベニチョウを求めて(Ⅲ)(秋目編Ⅰ) 春成正和
- 19 " (P30)ツマベニチョウを求めて(Ⅳ)(秋目編Ⅱ) 浜川知博
- 20 " (P37)秋目採集記 浜川知博

- 21 7号(P38)(大浦～野間池)採集記 田中洋海
 22 " (P42～43)笠沙路採集記 春成正和
 23 8号(P15)大当採集記 山口秋生
 24 " (P30～40)1970年の南薩の蝶類記録 山口秋生・阿久根雄二・木佐貫彰
 25 " (P42)ツマベニチョウを求めて 山口秋生 浜川睦文
 26 9号(P12～13)1971年のツマベニチョウの記録 木佐貫彰
 27 10号(P24)秋日採集記 唐仁原俊哉
 28 " (P25～26)ツマベニチョウを求めて 唐仁原俊哉
 29 13号(P22～23)野間池～黒瀬～椎木採集記 鮫島重喜
 30 " (P24～26)迷蝶を求めて 大迫達洋
 31 " (P36～37)大浦町・笠沙町赤生木のツマベニチョウ 大迫達洋
 32 " (P59)蝶の初見日(その2) 上山俊哉

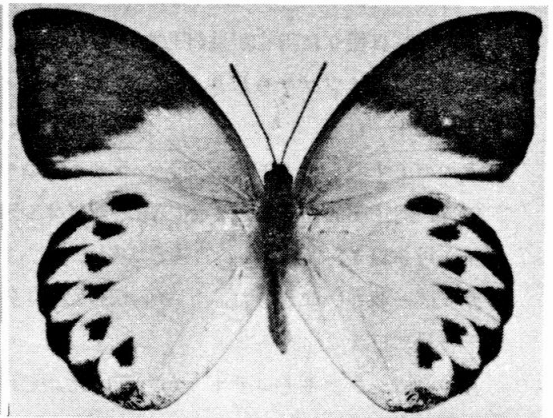
以上、まのせ各号

- 33 鹿児島県の蝶類(P101～110) 1962 福田晴天・田中洋(鹿児島昆虫同好会)
 34 鹿児島県の蝶の生活 1967 福田晴天・田中洋(鹿児島昆虫同好会)
 35 SATSUMA 68号(P44～45) 昭和48年～49年春までのささやかな蝶類報告
 1974 山崎淑子
 36 原色日本昆虫生態図鑑 IIIチョウ編 1972 福田晴夫・久保快哉・葛谷健・高橋昭・
 高橋真弓・田中蕃・若林守男(保育社)

ツマベニチョウ



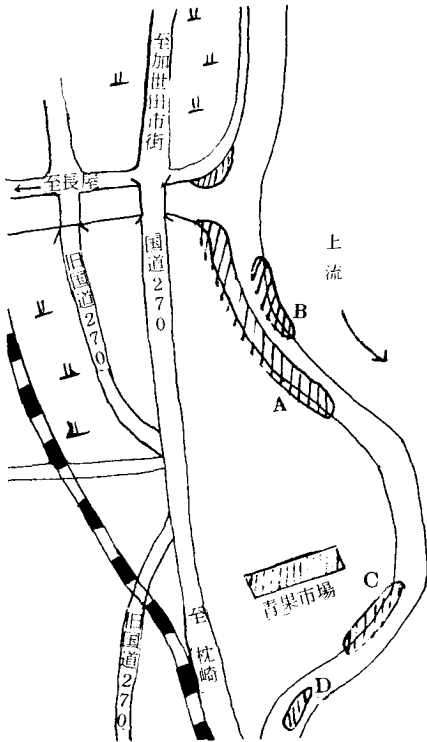
♂: 1976年10月17日 蛹採集
 (笠沙町赤生木市崎木場)
 同 年10月18日 羽化
 (大浦町 越路) 採集飼育とも筆者



♀: 1976年10月17日 蛹採集
 (笠沙町赤生木市崎木場)
 同 年10月19日 羽化
 (大浦町 越路) 採集飼育とも筆者

加世田川（或る地点での野鳥）

末永俊英



加世田川は、津貫蔵多山山麓に源を発して万ノ瀬川に合流するまで、その大部分は国道270号線に沿って流れている。それだけに、そこを通過して通学する僕にとっては、そこに鳥でもいればすぐ目につく場所も少なくない。それで、下校時に、内山田から上加世田の中間、青果市場のあたりを観察することにした。

〔十月二十五日〕

朝、ちょっと冷えこんだ。

B地点に、カルガモ十七羽、シラサギ(コサギ)一羽、マガモ一羽を確認。

〔十月二十七日〕

マガモが特に目立った。

〔十月二十八日〕

C地点に、カルガモ七羽、マガモ十九羽、ササゴイ二羽、シラサギ(コサギ)が2羽いた。

〔十月二十九日〕

カモを写真撮りに行くが逃げられる。その後、しばらく付近をぶらついたが、図以外の上流でどうも、カイツブリらしきものを見る。ヒクイナもいる。

〔十月三十一日〕

カルガモ十羽、マガモ十五羽、シラサギ(コサギ)二羽いた。一昨日前に聞いたことだが、その昔、内山田の立神には、滝のあたりにオシドリがいたそうである。

〔十一月一日〕

カモは一羽もいなかった。

〔十一月二日〕

A地点にシラサギ(コサギ)が九羽いた。C地点にも、シラサギ(コサギ)が七羽、コガモが三羽いた。しかし、この二日、カルガモとマガモは、どこへ行ったのだろうか。ハクセキレイが多い、五羽ぐらいは目についた。先日、カイツブリと思ったのは、コガモか?

〔十一月三日〕

シラサギ(コサギ)が五羽、カルガモ十五羽いた。二日ぶりに見るカルガモに安心したが、マ

ガモはやはり見なかった。

〔十一月四日〕

カルガモ十五羽，シラサギ（コサギ）二羽。

〔十一月五日〕

カルガモ五羽，シラサギ（コサギ）二羽。

〔十一月七日〕

カルガモ一羽，シラサギ（コサギ）二羽。

〔十一月八日〕

カルガモが，A地点とC地点の間との間の川がカーブした付近に七羽いた。

〔十一月九日〕

A地点より，少し上流にカルガモが，十数羽はいたが，はっきり確認できず，付近は，ヨシやササが繁茂しているので，確認が困難，シラサギは二羽いた。

〔十一月十日〕

D地点は，いわゆる川の中にできた砂州であるが，そこにカルガモが十一羽，やや上流にシラサギ（コサギ）が一羽。

〔十一月十一日〕

A地点にカルガモが九羽，シラサギ（コサギ）が二羽，D地点の砂州でない所に，シラサギ（コサギ）が2羽。

〔十一月十二日〕

D地点に，シラサギ（コサギ）が一羽，それより上流側の田んぼの上空をもう一羽飛んでいた。

〔十一月十三日〕

D地点の砂州にカルガモが十六羽，シラサギ（コサギ）が二羽いた。

登校時には，D地点より上流側の田んぼに，シラサギ（コサギ）が九羽いた。

〔十一月十四日〕

D地点に，カルガモが二十羽，シラサギ（コサギ）が一羽。

〔十一月十五日〕

C地点より上流は，きわめて砂州が多くて，そこがD地点のようにカモ類のよい休み場所となっているのであるが，市の河川事業の一環として，砂州は除去されようとしていた。川には，ショベルカーなどが入っているため鳥は一羽もいなかった。

〔十一月十六日〕

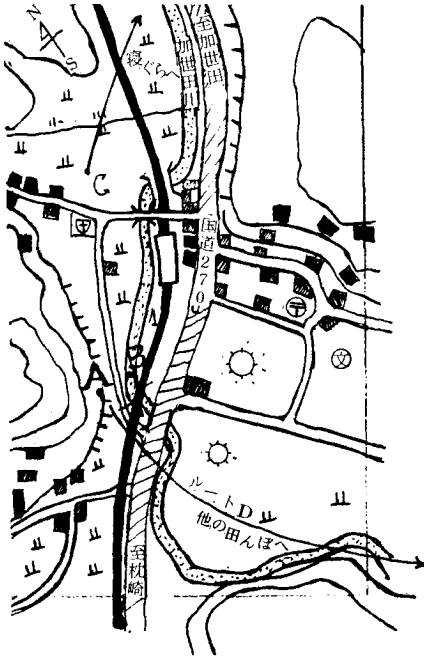
カモは例の河川工事によって，今日もいなかった。

〔十一月十八日〕

川にはブルドーザーが，いるためにシラサギ（コサギ）が五羽上空を飛んでいたが，その一羽がそのうち川岸に舞い降りて捕食し始めた。

以後，シラサギ（コサギ）は見るも，カモ類は一羽も見ず。

〈コサギの行動範囲〉



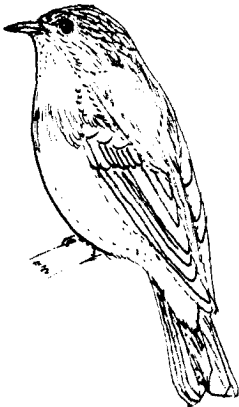
コサギが行動してまわる地形を説明すると、川は加世田川の上流にあたり、川幅8メートル前後で浅い。住宅地・工場敷地を除けば、田畑と山林ばかりである。

- (1) 午前8時頃になると、もうB地点で川の浅瀬で何かしている。よく見ると捕食しているらしい。数日観察しているうちに、魚を捕えるのを目撃したこともある。時々近くの道を人が通ると警戒して、川岸の繁みの方へ近づいたり、少し飛んで川に沿って位置を変えたりする。人が見るといって、飛びたつて、A地点の雑木林の大きな樫の木の枝に止まって、しばらく羽を休める。この木が、よほど気に入っているのか、一日を通じてよく見かける。ルート口を通して別の場所に移動することもよくある。

- (2) 午後一時頃になるとC地点の田んぼでよく見かけることが多い。この付近の田んぼは、まん中に小川が流れており、田んぼのあぜに沿って小さな溝が流れているのが普通である。

冬でも割合水は豊富で水もきれいであるため、小さな溝にかかわらず、メダカやおたまじゃくしが多い。どうやら、それを捕食しているらしい。そこで、二月二日には、そこで二羽を確認。二羽は、ある間隔をおいて行動し、近づきすぎると一羽が追い払うといった感じで飛び上がり一羽が逃げると再び、舞い降りて捕食し始めた。それより少し離れた所には、ゴイサギの幼鳥〈俗に言うホシゴイ〉がいた。

- (3) これらの鶯は、夕方六時頃になると、北の方へ飛んでゆく。僕の予測としては、内山田付近の田んぼにいる鶯群と合流してどこかの寝ぐらへ帰るのではないかと思う。



秋日のコサメビタキ

末永俊英

〔十月二十八日〕

昼掃除の時、グランドの西側のプール付近の道路に沿って並んでいるセンダンの木に、せわしげに飛び回っている一匹の小さな小鳥を見つけた。近づいて見るとコサメビタキだった。夏鳥であることから、南の国へ帰る途中であったのだろうか。

シラサギの行動

末永俊英

シラサギとは、いわゆる体の羽毛が白い鷺のことで、この仲間日本で見られるものは、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギの四種類で、ここでいうシラサギとは、コサギのことである。この四種の特徴を表に書くと次のようになる。

各部	種名	ダイサギ		チュウサギ		コサギ		アマサギ	
	羽衣	夏羽	冬羽	夏羽	冬羽	夏羽	冬羽	夏羽	冬羽
くちばし		黒, 基 黄緑色	黄色	黒, 基 少し黄	鮮黄 先端黒	黒色	黒, 下 基部黄	鮮黄で 朱帯ぶ	白黄色
目先の皮膚		鉛青色	黄緑色	鮮黄色	黄色	黄緑色	白黄色	黄色	白黄色
あし		黒色	黒色	黒色	黒色	黒色	黒色	黒茶色	黒茶色
趾(あしゆび)		黒色	黒色	黒色	黒色	緑黄色	緑黄色	黒色	黒色
羽冠		なし	なし	なし	なし	2, 3	なし	橙黄色	なし
胸の飾羽		なし	なし	白色 ふさ状	なし	白色	白色	橙黄色	なし
背の飾羽		ふさ状 で長い	なし	ふさ状 で長い	なし	ふさ状 で長く 先端巻 き上る	ふさ状 夏羽ほ ど長く なし	橙黄色 ふさ状	なし
体の色		純白	純白	純白	純白	純白	純白	頭頸部 と背飾 羽橙黄	白, 頭 頸部に 橙黄色
大きさ		大		中		小		コサギより小	
本州出現		夏鳥, 西日本に 少数, 冬も見		夏鳥, 西日本に 少数越冬。		夏鳥			

保育社の標準原色図鑑全集5より

さて、表に見るように、シラサギ類は一応夏鳥であり、その一部が西日本各地で越冬するのである。そのコサギが加世田市付近に見られるようになるのは、十月中旬ごろからでつまり、越冬にあたる冬の間だけである。各地の川、田などでよく見られるようになるのである。その中の一・二羽が、津貫でも毎日のように見られるため観察してみた。次はある一羽の一日の行動を断片的に記録したものである。

アカショウビン

末永俊英

毎年、初夏の頃合雨多くなる頃、キョロロローッ、キョロロローッという声が聞こえてくる。アカショウビンが、雨乞鳥と言われる所以である。

以前、ある友人の家の庭先に営巣したということを聞いたことがあったが、幸運にも、それと同じようなことにめぐりあうことができた。

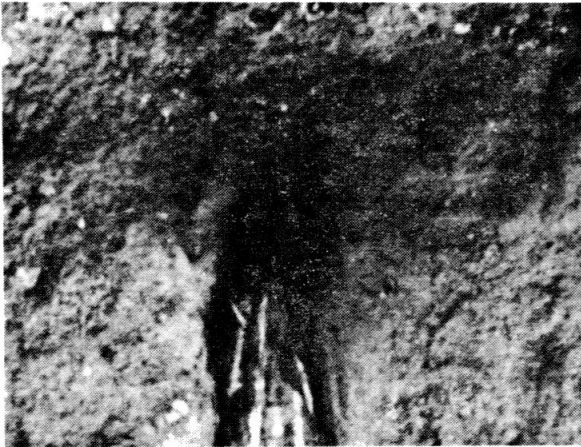
アカショウビン *Halcyon coromanda*

ツグミぐらいの大きさで、日本には夏鳥として渡来し、低山帯の森にすむ。キョロロローッ、キョロロローッと特徴のある声をよくきくが、姿を見ることは割合に少ない。曇天の日に鳴くことが多く、この声は雨の前ぶれであると言われ、雨乞鳥(アマゴイドリ)という地方もある。冬は台湾、中国南部、フィリピンなどに渡る。

左図で見るように、その姿はカワセミに似るが、体はずっと大きい。全体が、美しい赤系統の色におおわれている。鹿児島の方では、キンギョドイと呼ぶらしい。



〔アカショウビン〕



〔アカショウビンの巣・入口〕

1 アカショウビンとの出会い

去年の七月の末、あるおばさんが、赤色の羽をした鳥が営巣している話を持ってきた。話の内容より、すぐアカショウビンとピンときた。というのは、その鳥は土手に横穴を掘って営巣している伝々。それだけ聞けば充分だった。何とか見たいものだとは思っても、何しろその巣というのは、内山田の金木田平にあるそのおばさんの、親戚の庭先にあるということで、僕は、金木田平(かなきたびら)がどこにあるのかさえ知らなかった。がしかし、八月一日の下校時、その金木田平といわれている一帯の

近くで、偶然にもそのおばさんと合った。それでさっそく場所を教えてもらい、ひとまず、家へ帰る。なぜ帰ったかという、アカショウビンは、たいへん美しい鳥でどうかその姿を写真に撮りたいと思ったからである。家につくと、さっそくカメラを用意して、現場へ急ぐ。

アカショウビンを初めて見たのは、小学校四年のことだったと思う。前々より、その異様な特徴ある声が、いつもその頃になると聞こえてくるものだから、声の主というのは気になっていた。その日も、小雨が降っていた。カッパか何か着てウナギをとるために、その餌のミミズとりをしていると、突然、頭上でその声がしたのでびっくりしたものだ。その声の主は、図鑑で見なれているアカショウビンであったことがわかったと、うれしくてならなかった。何と美しい鳥だろうとも思った。その姿は、僕の頭の中に焼きついている。



〔巣の構造〕

さて、目的地には到着したが、巣をよく見るともうそこには、どうやらヒナはいないらしい。そこのおばさんに、聞いてみると、今朝まで巣の中でピーピー鳴いていたと言う。それなら、巣立ったとしても、まだその辺りにいるはずと、その近くを捜す土手の裏手は雑木林になっているのである。そこを、捜しているうちに三羽は確認できた。どうも幼鳥らしい。成鳥のあの赤い色ほど派手ではなく、全体が黒ずんでいる。そうしている間に、親鳥が餌を持って帰ってきた。どうやらくちばしにくわえているのは、サワガニらしい。雑木林の中から低くはあるが、あの独特な声が響いてくる。

その間に先づ、巣を写真に撮ることにする。その時わかったのが、巣の入口付近には、多くのペリットが散乱している。ほとんど全部が、サワガニの足である。数枚撮り終わると、いよいよ今度は、アカショウビンの撮影にとりかかる。200mmの望遠レンズでは、鳥の写真を撮るには、なかなかむずかしい。できるだけ、近づくことが先けつである。それで、ヒナ鳥の一羽にゆっくりと近づく、なる程、巣立ったばかりと見えて、あまり警戒はしない。そこで撮りながら近づくが、最終的には3メートルぐらいまでせまった。いつの間にか、親鳥が近くにきていて、あの、低くてもよく響く声を発して警戒していた。それに呼応したかのようにヒナ鳥たちも、雑木林の奥の方へと逃げていった。親鳥が近づいたおかげで、やや小さいが成鳥の撮影にも成功した。全部で十二枚位撮っただろうか。一応、大成功だった。しかし、せっかく営巣したのに、親鳥の給餌する場面も撮れずに終わったことに、少々不満。ここのヒナは、全部で五羽いたという。

サツマジミの早い記録

2年 黒 葛 俊 弘

1978年 2月6日

加世田市小湊相星川河口付近 1♂採集 大迫達洋

1978年 2月23日

曾於郡志布志町田之浦黒葛入口バス停付近 1♂採集 大迫達洋

すんでいる場所としては、平地、山地の森林に棲み、都会地でも大きな木の残っている林には棲んでいる。夏鳥として全国に渡来する。

さてそこで、2年前先輩が行ったペリット調査をもう1回やって比較してみようと思い結果は下のとおりである。なおペリット調査とは、ここではアオバズクが食べ残したものを、拾い集めて、どんなものを食べているのかを調べるものである。またこの調査には、1年の若松・秋永・東小蘭・大島・満永とも協力して行った。

期間：時間：6月16日～7月18日 午前7：30分～7：40分迄の10分間

調査方法： センダンの木の下のペリットを拾い集める。

6月16日 調査開始。昨日までのものは清掃されてあるので前夜食べ残したと思われるペリットを拾い集める。内容は甲虫と蛾で、半々ぐらいの割合である。食べ残されている部分は、甲虫の場合は、頭、翅、脚部なのに対し、蛾はおもに翅だけだが、たまに頭や胴体の一部が残されているのもあり、まだびくびく動いているのもあった。
放課後、拾ったペリットを図鑑により鑑別する。その結果が次のようであった。()
の中はその個体数。

鞘翅目 ドウガネブイブイ(2)、ヒメカンショコガネ(1)、アオドウガネ(1)

鱗翅目 マイマイガ(2)、オニベニシタバ(1)、蛾の未同定種(1) 個体数(1)

計 (8)

6月17日 前日とあまり変化は見られないが、甲虫が一種類しかいないのが目につく。

鞘翅目 ドウガネブイブイ(3)

鱗翅目 セスジズメ(1)、フクラスズメ(1)、コシロシタバ(1)

計 (6)

6月18日 前の2日間と比べると、ずいぶん蛾が多くなっている。また種類も同じように多く、
19日 になっている。

鞘翅目 クワカミキリ(1)、カナブン(1)

鱗翅目 セスジズメ(2)、ベニシタバ(2)、フクラスズメ(1)、メンガタズメ(1)
クスサン(?) (1)、クロホウジャク(?) (1) [?]はやや疑問

計 (10)

6月20日 今日の調査は雨が降っていて、よく調べることができなかった。

鞘翅目 カナブン(1)

鱗翅目 ベニシタバ(3) 計(4)

6月21日 今までになく蛾の個体数が多い。それに比べ甲虫の個体数はたった1である。また全体的にみると個体数はかなり多くなっている。

鞘翅目 クワカミキリ(1)

鱗翅目 セスジスズメ(4), コシロシバタ(15), メンガタスズメ(4), フクラスズメ(1)

計 (25)

6月22日 雨のため調査できず。

6月23日 小雨。前々日同様コシロシバタの個体数が圧倒的に多い。また甲虫の種類が今日は増えている。

鞘翅目 アオドウガネ(1), カナブン(1), クロカミキリモドキ(1), オオクロカミキリ(1)

鱗翅目 コシロシバタ(21)

計 (25)

6月24日 なんと今日は前日のコシロシバタの個体数に比べて、急激に減っている。また蛾は増えているようである。全体的な個体数は前2日間に比べて半分に減っている。

鞘翅目 カナブン(1)

鱗翅目 ベニスズメ(3), コシロシバタ(4), セスジスズメ(1), ピロウドスズメ(1)

計 (10)

6月25日 今日は始めて蜻蛉目の未同定種1が落ちていた。

26日

鞘翅目 ゴマダラカミキリ(1), カナブン(2)

鱗翅目 ベニシバタ(2), セスジスズメ(1), コシロシバタ(7) 蜻蛉目 未同定種1

計 (14)

(トンボ)

6月27日 やや種類が多いようである。また個体数も今までのうちで最も多い。目につくことはそればかりではなく、今まで蛾の大部分をしめていたコシロシバタの個体数が1と急激に減っている。またカナブンが増えている。

鞘翅目 ノゴリカミキリ(3), カナブン(13), ドウガネブイブイ(2), 甲虫の未同定種(1)個体数(4)

鱗翅目 ベニスズメ(1), ウチスズメ(1), セスジスズメ(1), メンガタスズメ(9), クロホウジャク(1), コシロシバタ(1), 蛾の未同定種(1)個体数(2)

計 (38)

6月28日 ドウガネブイブイの個体数(15)というのが目につくが、昨日といい今日といい、
だいふ甲虫の種類も個体数も以前とすると増しているようだ。

鞘翅目 カナブン(14), コマダラカミキリ(1), ドウガネブイブイ(15)

鱗翅目 コシロシバタ(7), ベニシバタ(1), ベニスズメ(1)

計 (39)

6月29日 今日を含めてここ3日間、急に個体数全体が増えている。こんなものかもしれないし
また他に特別な理由があるのかもしれないが、それにしても多すぎるような気がする。

鞘翅目 ノコギリカミキリ(6), ドウガネブイブイ(3), カナブン(7)

鱗翅目 セスジスズメ(1), コシロシバタ(10), ベニスズメ(1), 蛾の未同定種(2)
個体数(3)

計 (31)

6月30日 どういう訳か、個体数全体が激減している。もしかすると他の場所でもえさをとって
いるのかもしれない。また蛾が1というのも今までにないことである。

鞘翅目 カナブン(6), ドウガネブイブイ(2), コマダラカミキリ(1)

鱗翅目 コシロシバタ(1)

計 (10)

7月 1日 雨のため調査できず。

7月 2日 だいふ蛾より甲虫の個体数の方が多いという傾向が一定してきているようである。

3日

鞘翅目 ドウガネブイブイ(12), カナブン(3), コマダラカミキリ(1), クロカナブン
(3)

鱗翅目 コシロシバタ(7), コガタノキシタバ(1)

計 (27)

7月 4日 とうとう今日は蛾が1種類もない。ここらあたりの蛾は、少なくなっているのかもしれない。

鞘翅目 キボシカミキリ(1), ドウガネブイブイ(7), クロコガネ(5), カナブン(10)
クロカナブン(2), オオクロカミキリ(5), コマダラカミキリ(1)

計 (31)

7月 5日～8日迄、期末試験のため調査できず。

7月10 しばらく調査を中断していたが、コシロシバタがやや増えているようだ。

鞘翅目 コマダラカミキリ(1), ドウガネブイブイ(3), カナブン(2), アザミカミキリ
(4)

鱗翅目 コシロシバタ(9)

計 (19)

7月11日 この調査を初めた時は、甲虫より蛾の方が種類も個体数も多かったが、今では甲虫の方が多という傾向が定着してきている。というより今日は蛾は落ちていなかったが、また、初めて半翅目のアブラゼミが落ちていた。

鞘翅目 ハイビロウドコガネ(1), サクラコガネ(1), ヒメカンショコガネ(1), オオクロカミキリ(1), コフキコガネ(3), アザミカミキリ(1), ドウガネブイブイ
(6)

半翅目 アブラゼミ(1)

計 (15)

7月12日 雨のため、あまりとれなかった。

鞘翅目 カナブン(1)

計 (1)

7月13日 今日蛾は落ちていなかった。また全体的個体数が、だんだん減ってきている。

鞘翅目 カナブン(8), ドウガネブイブイ(2), オオクロカミキリ(3)

半翅目 アブラゼミ(1)

計 (14)

7月14日 いくらか全体的個数が増しているようだが、相変わらず蛾は落ちていなかった。また個体数としては、少ないがアブラゼミが毎日落ちているようになった。

鞘翅目 アザミカミキリ(2), カナブン(11), ドウガネブイブイ(5), マダラカミキリ
(1), コフキコガネ(7)

半翅目 アブラゼミ(1)

計 (27)

7月15日 あまり変化は見られないが、全体的個体数がまた減っている。

鞘翅目 ドウガネブイブイ(3), コフキコガネ(3), カナブン(2), アザミカミキリ(1)
甲虫の未同定種(1)個体数(2)

半翅目 アブラゼミ (1)

計 (12)

7月16日 全体的個体数が、あまりに少なくなっている。

17日

鞘翅目 マダラカミキリ (1) , ドウガネブイブイ (3) , アザミカミキリ (1)

半翅目 アブラゼミ (1)

計 (6)

7月18日 前日と同様、全体的個体数が少ない。またアブラゼミが (3) と今までで最も多い。

鞘翅目 アザミカミキリ (1) , コフキコガネ (1)

半翅目 アブラゼミ (3)

計 (5)

7月19日 今日はペリットが1つも落ちていない。また我々がペリットを拾う時、いつもおおちの木梢からそれを見おろしていたアオバズクの姿も見えない。たぶんどこかへ帰っていたのだろう。

< 考 察 >

全調査を終えてみて、最初のうちは、蛾が大きな割合を示していたが、調査を続けていくうちに徐々に蛾よりも甲虫の方が多くなり、後半の9日間というものは、蛾は全く落ちていなかった。2年前に先輩の行ったものと比較してみたところ、全く蛾が落ちていなかったということはないが、やはり、後半になると甲虫の固体数が増えていることがわかった。しかし、2年前の調査では、期間が、7月13日～7月22日迄の10日間で、今回のものとはやや比較しにくい部分もあるが、まあ似たようなものである。

そこで何故、後半になると甲虫だけになってしまったかということであるが、この時期はヒナと関係があるのではないだろうか？ ヒナの成長にとって、蛾よりも甲虫の方が何らかの原因で良いのではないだろうか？ これは単なる憶測にすぎないが、また他に考えられる原因として、単順にアオバズクは、どちらかという甲虫類よりも蛾類の方を好んでいて、その行動範囲内の蛾類が日がたつにつれて、だんだん少なくなりしかたなく甲虫を食べるようになったのではなかろうか？ まだいくつかの他に考えられるが、いずれもはっきりしたことがわからないので、このことについては、ここで止めておくことにする。

この調査を始めた時、何故こんなにも多くのペリットが、このおおちの木の下に落ちているのだろうと不思議に思った。このペリットがすべておおちの木にいた昆虫のものだけということは、と

でもじゃないが考えられない。とするとアオバズクの1つの習性として、捕獲した昆虫などをおおらの木まで運んできて、そして食べるのではないだろうか？　そういうふうになるとつじつまが合ってくる。またそれによって行動範囲もかなり限定されてくる。しかしこれも憶測であって、はっきりしたことは言えない。

今回の調査で少し期待していたことがあったが、それは、アオバズクの産卵から巣立ちまでのことが、実際見られるのではないかということだった。しかし相手は夜活動するのでそれもだめだった。

ここで調査期間中に拾ったペリットのまとめをしておくことにする。全体の種類、及び個体数が1目でわかると思う。一応鞘翅目、鱗翅目、半翅目、蜻蛉目に分け、個体数の多かったものから順に記すことにする。

〔鞘翅目〕	〔総個体数〕	〔鱗翅目〕	〔総個体数〕
カナブン	(83)	コシロシバタ	(83)
ドウガネブイブイ	(68)	メンガタスズメ	(14)
コフキコガネ	(14)	セスジスズメ	(11)
オオクロカミキリ	(10)	ベニシタバ	(8)
アザミカミキリ	(10)	ベニスズメ	(6)
ノコギリカミキリ	(9)	フクラスズメ	(3)
ゴマダラカミキリ	(6)	マイマイガ	(2)
クロカナブン	(5)	クロホウジャク	(2)
クロコガネ	(5)	オニベニシタバ	(1)
ヒメカンショコガネ	(2)	クスサン	(1)
アオドウガネ	(2)	ビロウドスズメ	(1)
クワカミキリ	(2)	ウチスズメ	(1)
マダラカミキリ	(2)	コガタノキシタバ	(1)
クロカミキリモドキ	(1)	蛾の未同定種	(6)
キボシカミキリ	(1)		計(140)
ハイビロウドコガネ	(1)		
サクラコガネ	(1)	〔半翅目〕	
甲虫の未同定種	(6)	アブラゼミ	(8)
	計(228)		
		〔蜻蛉目〕	
		未同定種	(1)
		全体合計	(377)

< 前ページの表からの考察 >

なんと全部合わせて、377匹。驚くべき数字だが、これは我々が単におおちの木の下で拾ったペリットの数だけにすぎないし、また拾い残したと思われるものもかなりあると思う。そのようなことを考えていくと、実におびただしい数字になるであろう。しかし実際これだけの数の昆虫類が我々の身のまわりに棲んでいたということも、ちょっとした驚きではないだろうか。ふだんの部活動の時などに学校付近の甲虫を採集しようと思っても、なかなか容易にはいかない。我々とアオバズクとでは比較にならないかもしれないが、みためよりは実に多いものだった。

甲虫と蛾が全体のほぼ大部分を占めているが、その中で個体数の多かったものとしては、甲虫のカナブン(83)、ドウガネブイブイ(68)、蛾のコシロシバタ(83)、というのが目につく。この3種のみで、全体の約62%にもおよんでいる。また表の数字は、単にアオバズクのペリットの数ということだけではなく、この時期の付近の昆虫類の数の状況も示しているようにも思われる。

< 反省 >

調査が始まって最初のうちは、「今日はどんなのが落ちてるだろうか」などと楽しみながらやっていたが、日がたつにつれて、除々にめんどくさくなってきた。しかし、なんとかみんなと力を合わせてやりとげることができた。一部名前のわからなかったものや、やや疑問の残るものがあったことや、期間中、試験のために調査を中断してしまったことなど残念である。

またよき参考になった2年前の記録を作成された先輩方に感謝します。

ミカドアゲハの記録

2年 中田悦朗

1976年 5月8日

加世田市竹田神社前 1♂採集(センダンで吸密) 大迫達洋

1976年 5月9日

大浦町長屋山 2頭目撃 大迫達洋

1977年 5月8日

笠沙町市崎木場 1頭目撃(クチナシで吸密) 大迫達洋

南 薩 地 区 の 蝶 の 分 布

2年 黒 葛 俊 弘

私達の学校のある加世田市を中心に南薩地区の各市・町における蝶の分布を、郷土蝶誌やその他の文献によって調べてみた。しかし、印のない蝶は、それぞれの市や町にいないかというところだけではわからない。実際、採集あるいは目撃されている。だが、今回は一応、そういうものをぬきにして、これらの文献によってのみ確認できる蝶だけを記載することにする。

		加 世 田 市	枕 崎 市	川 辺 郡					日置郡	
				笠 沙 町	坊 津 町	大 浦 町	川 辺 町	知 覧 町	金 峰 町	吹 上 町
(1) セセリチョウ科										
1.	ダイミョウセセリ				○	○	○	○		
2.	アオバセセリ		○		○			○		
3.	ロチャバネセセリ							○		
4.	ホンバセセリ							○		
5.	ヒメキマダラセセリ					○				
6.	キマダラセセリ		○		○					
7.	オオチャバネセセリ				○			○		
8.	チャバネセセリ		○		○			○		○
9.	ミヤマチャバネセセリ									
10.	イチモンジセセリ		○		○		○	○		○
11.	クロセセリ		○		○			○		
12.	オキナワピロウドセセリ	○								
(2) アゲハチョウ科										
1.	ジャコウアゲハ		○		○	○				
2.	アオスジアゲハ		○		○	○		○		
3.	キアゲハ		○		○			○		
4.	アゲハ		○	○	○	○		○		○
5.	クロアゲハ	○	○		○			○		
6.	ナガサキアゲハ	○			○	○	○			
7.	モンキアゲハ	○	○	○	○	○	○			

(2)	アゲハチョウ科	加	枕	笠	坊	大	川	知	金	吹
	8. ミカドアゲハ	○								
	9. シロオビアゲハ				○					
(3)	シロチョウ科									
	1. キチョウ		○	○	○		○	○		
	2. ツマグロキチョウ		○		○		○			○
	3. モンシロチョウ		○	○	○		○	○		
	4. スジグロシロチョウ		○		○		○	○		
	5. シマキチョウ		○	○	○			○		
	6. ツマベニチョウ		○	○	○					
(4)	シジミチョウ科									
	1. ムラサキシジミ	○	○	○	○		○	○		○
	2. ムラサキツバメ				○			○		
	3. ベニシジミ		○				○			
	4. ゴイシジミ							○		
	5. ヤマトシジミ		○	○	○	○				○
	6. ルリシジミ		○	○	○			○		
	7. サツマシジミ		○	○	○		○	○		
	8. ツバメシジミ		○	○	○		○			
	9. タイワンツバメシジミ				○					
(5)	ウラギンシジミ科									
	1. ウラギンシジミ				○			○		
(6)	マダラチョウ科									
	1. アサギマダラ		○	○	○		○			
(7)	タテハチョウ科									
	1. ツマグロヒョウモン		○	○	○			○		○
	2. イチモンジチョウ				○			○		
	3. コミスジ		○		○		○	○		○
	4. キタテハ		○		○			○		
	5. ルリタテハ		○		○					

(7)	タテハチョウ科	加	枕	笠	坊	大	川	知	金	吹
6.	ヒメアカタテハ		○		○		○	○		
7.	アカタテハ			○	○			○		
8.	タテハモドキ	○	○		○				○	
9.	イシガケチョウ				○					
10.	スミナガシ				○			○		
11.	ゴマダラチョウ	○			○			○		
12.	アオタテハモドキ		○	○	○					○
13.	メスアカムラサキ		○		○				○	
(8)	ジャノメチョウ科									
1.	ヒメウラナミジャノメ		○		○					
2.	クロヒカゲ				○		○	○		
3.	ヒメジャノメ		○		○			○		
4.	コジャノメ		○		○		○	○		
5.	ウスイロコノマチョウ		○		○			○		
6.	クロコノマチョウ		○	○	○			○		

晩秋のヤクシマルリシジミの記録

2年 黒 葛 俊 弘

場 所：加世田市本町旭通り 旭銀行前の駐車場脇

観察者：大迫達洋

1977年10月25日 1♀がバラに産卵，卵 数個確認

11月 5日 終令幼虫1匹目撃

11月 9日 初令2匹，終令1匹，卵，多数目撃

11月13日 1♀がバラの回りを飛んでいるが産卵は確認できず。

終令3匹，卵，少数目撃

その後，観察はしなかった。

甲 虫 記

2年 川原 浩二

我々は、6月から8月にかけて、甲虫採集を試みた。ところが驚いたことに、以前先輩たちが採集した標本箱に入っている甲虫などは、ほとんど見られなくなったのである。我々の周辺加世田は、そんなにも自然がこわされたのだろうか。それとも甲虫自身が姿を現わさなくなったのだろうか。だが、一応採集した種類の甲虫を明記しよう。

※クワガタムシ科

- ヒラタクワガタ 6月23日(校内)♂1
- ノコギリクワガタ 6月21日(学校付近)♂1
- コクワガタ 6月15日(校内)♀2

※カミキリムシ科

- アメイロカミキリ 6月20日(校内)1
- ヨツボシカミキリ 6月18日(吹上)・6月11日(川畑)2
- ナガゴマフカミキリ 6月20日(校内)2
- ヤマカミキリ 6月12日(校内)1
- シロオビチカミキリ 6月19日(川畑)1
- アオスジカミキリ 6月13日(校内)1

※ハンミョウ科

- ハンミョウ 6月18日(学校付近)2

※ツチハンミョウ科

- トサヒラズゲンセイ 7月3日(校内)1

※ヒョウタンゴムシ科

- ホソヒョウタンゴムシ 6月16日(学校付近)1

※テントウムシ科

- シラホシテントウ 6月9日(川畑)1

✿ホタル科

- ヘイケボタル 6月14日(川畑)1

✿シデムシ科

- ムナグロツヤシデムシ 8月23日(川畑)1

✿タマムシ科

- タマムシ 7月10日(川畑)1

1977年度 蝶の初見日 (その2)

2年 中田悦朗

ルリシジミ	3月20日	大浦町越路	+	大迫 達洋
ヤマトシジミ	3月21日	〃	1頭目撃	〃
ヒメウラナミジャノメ	4月11日	加世田高校内	1頭	〃
コジャノメ	4月19日	〃	1頭	〃
ヒメジャノメ	4月29日	大浦町亀ヶ丘山頂	1頭	〃
ダイミョウセセリ	4月24日	笠沙町赤生木松木場	1頭	〃
イチモンジセセリ	4月29日	大浦町亀ヶ丘登山口	1頭	〃
クロセセリ	4月29日	大浦町亀ヶ丘登山道	2頭	〃
チャバネセセリ	5月 8日	大浦町越路	+	〃

[+は少ないの意]

1977年度 蝶の採集記録 (その1)

2年 中田悦朗

2月20日	笠沙町野間岳	ムラサキシジミ	1頭目撃	大迫 達洋
23日	加世田高校内	アカタテハ	1頭目撃	〃
26日	笠沙町赤生木松木場	ナガサキアゲハ	1頭採集	〃
28日	加世田高校内	アカタテハ	1頭目撃	〃
		キチョウ	1頭目撃	〃
3月 6日	大浦町越路	キチョウ	1頭目撃	〃
		ツマグロキチョウ	1頭採集	〃
		ムラサキツバメ	1頭目撃	〃

糸とクモの生活

2年 川原 浩二

造網性のクモも非造網性のクモも例外なく糸を生活に利用している。種類により、進段階により、生活形式により糸の種類や用途も各方面に分化を生じ、これと共に多くの糸腺の発達をみる。

1. しおり (Dragline) クモが歩行する時に必ず引いている糸であり、これが降下する時に利用される場合は、垂下線 (Parachute) といい、すべてのクモに共通した用途である。
2. 附着盤 (Attachment disc) しおり糸や垂下線などの起点となるもので多くの糸で作られむ固定盤である。
3. 捕帯 (Swathing band) 獲物を捕えた時。これをぐるぐるまきにする糸である。
4. 精網 (Sperm-web) 成熟した雄が自己の生殖門より出た精液を触肢に移すため、ごく小さい数 mm 平方の網を作りこれに精液を滴下させる。
5. 網 (Web) 捕虫用に利用される。
6. 住居 (Nest) 安息所であり、待ち伏せ場所であり、時には産室・脱皮室・越冬室となる。
7. 卵のう (Egg-Cocoon) 卵を多数包んで保護するため糸でまゆ状の袋にしたもの。
8. 流れ糸 (Gossamer) 遊糸ともいう。子グモが旅立つ時に空中に流す糸で、気流にのったこの糸のはしにクモが下って広範囲に分布される。この糸だけが多数切れて流れることがある。

このようにクモは、ふだん我々が1種にしか見えない糸を、多数区別して使い分けている。この用途に合わせて多種の糸を出しているのだろうか。

学校周辺の蜘蛛の特徴の記載と採集記録

1年 平山太思

この記録は1978年度の主に校内で採取した蜘蛛類を記したものである。なお、蜘蛛については、一般によく知られていないので説明その他いろいろと書いていきたい。特にジョロウグモは、この秋成長した大きなものがみられたので、これについては詳しく調べてみた。

〔1〕 コガネグモ科 (Argiopidae)

(1) ジョロウグモ

9月26日 校内 1♀	10月4日 校内 1♀1♂
10月8日 校内 2♀	10月22日 校内 1♀

〈特徴〉

10月4日に捕えた♀ (体長20mm)

1. 頭胸部

a 額 垂直に突出する



b 眼



- ・数は8つで2列に並ぶ
- ・カーブは後曲
- ・各眼の大きさは変わらない
- ・側眼は接し、同大
- ・中眼或は方形
- ・色は茶褐色でふちは黒っぽい

- c 上顎 ・鋭い牙有り
・歯が何本か見えた
- d 触肢 ・爪があり、その爪には歯が有った
- e 歩脚 ・第4脚, 第1脚, 第2脚, 第3脚の順に長い
・転節～茶色
・腿節～基節側から黒(10mm), 黄(2mm), 黒(3mm)
・膝節～黒(3mm)
・脛節～基節側から黒(3mm), 黄(3mm), 黒(5mm)
・蹠節～基節側から黄(2mm), 黒(15mm)
・節～黒(3mm)
・長く刺なし
・蹠節は 膝節合長より長い

2 腹部 円筒形

- ・一見して明瞭な蜘蛛で黄と緑青色の荒い横縞がある。
- (2) ナガコガネグモ
10月 4日 校内 1♀ 11月 5日 竹田神社 1♀
11月13日 竹田神社 1♀
・腹部が長い, かくれおびは変化に富み, 並列したジグザグだった。体にふれると長い間網を激しくゆすった。
- (3) スズミグモ
10月17日 川畑周辺 1♂
・背甲黄褐色で胸部両側は黒褐色。歩脚黄褐色の輪紋がある。腹部は縦長で両肩に円錐状の突起がある。
- (4) ゴミグモ
10月17日 川畑周辺 1♂
・背甲は黒褐色。胸板は黒褐色。腹部は長く黒褐色で8個の突起を持つ。

〔 2 〕 キシダグモ科 (Pisauridae)

- (1) スジプトハシリグモ
11月 5日 竹田神社 1♂
・眼は8つで2例に並ぶ。前眼列はほぼ端直で後列は後曲する。背甲は黄褐色で正中部に幅の広い黒褐縦条があり, 側縁も黒褐色。腹背も同様黒褐正中条がある。胸板は長さ>幅
- (2) スジアカハシリグモ
11月12日 川畑周辺 1♂

[3] タナグモ科 (Agelenidae)

(1) クサグモ

11月28日 学校周辺 2♂

- 眼は両列眼強く前曲する。前中眼は最大で、後中眼は最小。背甲は黄褐色で正中両側に褐色の2縦条がある。胸板は黄色で長毛も生じる。

[4] ジグモ科 (Atypus)

(1) ジグモ

11月28日 学校周辺 1♀

- 頭胸部は方形。上頭は長大でよく発達し前方に突出る。眼は前中眼に接近して左右に4眼集団をなす。胸板は前方角ばる

1977年 蝶の採集記録 (その2)

		2年 中 田 悦 朗	
3月 9日	加世田高校内	モンシロチョウ	1頭目撃 大迫 達洋
		アカタテハ	1頭目撃 //
20日	大浦町越路	ベニシジミ	1♂1♀採集 //
		ルリシジミ	1♂採集 //
		ツマグロキチョウ	3頭採集 //
		スジグロシロチョウ	1♂採集 //
		ツマグロヒョウモン	1♀採集 //
		ルリシジミ	} 目撃 //
		ムラサキツバメ	
ツマグロキチョウ			
キチョウ			
3月21日	大浦町福元(長屋山林道)	モンシロチョウ	} 目撃 //
		キチョウ	
		ヤマトシジミ	
		ツマグロキチョウ	
		キタテハ	
		ムラサキシジミ	

ホタルについて

2年 大坂 あけみ

ホタルは、鞘翅目ホタル科に属する動物で、この名は「火垂る」ということから起こったといわれています。ホタルの翅のありさまは、カミキリムシによく似ていますが口は発達していません。雌は水辺の草の根元に卵を産み1ヶ月ほど絶つと黒い幼虫がかえります。幼虫は昼は草の根際や、川底の小石の下などにかくれていますが夜になると出てきて小さい虫や、モノアラガイ、カワニナ、マメタニシ、シャイリガイなどの小さな貝を食べて大きくなります。翌年の4、5月頃に水辺の土の中に入って蛹となり、約2週間たつと成虫になります。

ホタルは、腹部に発光器があって美しい光を出しますが、発光の目的は本来異性に対して自分の存在を示すことにあるといわれていて、出す光の色や点滅の間隔などは、ホタルの種類ごとにきまっています。ほかの種類に間違えられないようになっているようですが、米国産のある種類のメスのホタルは、別の種類のメスと同じパターンの光を放って、そのオスをだましておびきだし、食い殺してしまうそうです。

交尾期の間だけ発光するのが普通ですが、ゲンジボタル、ヘイケボタルのように蛹、幼虫、卵などすべて光を放つものがあります。ホタルの発光のメカニズムについては、まだよくわかっていませんが、基本的なしくみは発光器内で行なわれる化学反応によっています。この先にはほとんど熱がなく、人間の手でつくりだすことのできるいかなる光よりも効率的にエネルギーを光に転換しています。ホタルの幼虫がたべる貝の虫には、肺ジストマ、カンテツ（肝蛭）、日本吸血虫などの人間や家畜にとって大変恐ろしい寄生虫が住んでいるので、ホタルはこれを食べて退治しているわけです。

ゲンジボタル

ゲンジボタルは、日本に分布しているホタルを代表するもので、日本産のなかでは最も体重が大きく12ミリから18ミリもあります。また、黒色で前胸に十字紋があります。

日本の本州以南の各地に分布し、成虫は6月ごろに最も多く、昼は川のほとりの草や木の葉の裏に隠れており、夜になると黄白色の光を放ちながら飛行します。幼虫は清流中に棲み、カワニナなどを食します。

このホタルも農薬の普及や水路の改修などの自然破壊により、その数が減少したことから、地元などで保護の必要がさげばれ、滋賀県の長岡ほか、8ヶ所で天然記念物（長岡は特別天然記念物）に指定されています。



ヒメハルゼミ

2年 木村 俊

セミは、同翅目セミ科に属する昆虫で、雄は特殊な発音器を持ち高音を発することで知られています。このセミ科には1,500以上もの種があり、特に我が国には、多種生息し、日本にきた外国人が「あれはどんな鳥の声か」と聞いたという話がつたわっているほどです。

体の大きさはまちまちですが、一般的にはかなり大きなものがあります。その生活は、通常卵を枯枝などに産みこみ、翌春この卵がかえり幼虫となり、枝から土地に落ち、土を掘るのに都合のよい特別な形をした前足で穴を掘りながら地中に入り込み植物の根を吸い、長い地中生活を送ります。幼虫期間はたいへん長く、北アメリカに生息する「17年ゼミ」は、幼虫時代が13年から17年もあるといわれており、我が国でよく知られているアブラゼミでも6年間といわれ、7年目にはじめて地上にでて成虫になります。成中になってからの寿命は極めて短かく、せいぜい1か月たらずだといわれています。

ヒメハルゼミは、体長が36ミリメートル内外の小型のハルゼミの一種で、羽に緑色の斑紋があるのが特色となっています。ハルゼミは日本特産種ですが、このヒメハルゼミは南方系に属するもので、分布は本州、四国、九州などです。茨城県、千葉県、新潟県がその生息の北限となっています。7月中旬に椎の大樹などのある森の中で数十匹がいっせいに声をそろえて鳴くことで「大ゼミ」などとも呼ばれています。

新潟県能生町、千葉県茂原市、茨城県笠間市が天然記念物として指定されています。

切手の意匠には、椎の木にとまっているヒメハルゼミが描かれています。〔発行日 昭和52年8月15日〕



1977年 蝶の採集記録 (その3)

2年 中田悦朗

3月21日 大浦町越路 モンシロチョウ

キチョウ

ルリシジミ 目撃 大迫達洋

アゲハ

キアゲハ

塘池のプランクトン

2月21日

1年 竹原和人

イケツノオビムシ

イケツノオビムシ(マミズツノオビムシ)

Ceratiium hirundinella (*Ceratiium hirundinella*)



- 高山湖沼から平地池，沼全国各地いたるところに出現する最も普通の種類，しばしば大繁殖をなし，水域が黄褐色になることがある。上部の突起の長短，下部突起の本数や開角は，地方により水質によって変異が多い。
- ツノオビムシ属(*Ceratiium* SCHRANKER)多くの鎧板からでき，縦横の溝が発達し，それぞれ1本の鞭毛をもつ。上部に1本，下部に2～3本の角状突起を存する。淡水産の種類は非常に少ない。

◦*Canthocamptus staphlinus* (JURINE)

全体が筒状をなし，第1触角が甚だ短い。

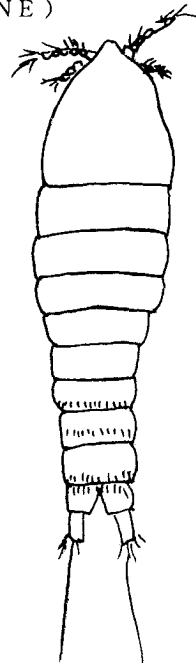
- わが国では津国十二湖，加良素沼等から報告されている。

※ケンミジンコの幼生

ケンミジンコの卵から孵化するとノープリウス*Nauplius*と称ばれる幼生になる。これが4～5回の脱皮を行って，後期ノープリウス*Metanauplius*となり，最後の脱皮をして成体となる。これらの変態が著しいこと及び各種類ともよく似ているために幼生での分類は一層むづかしい。

※ケンミジンコのノープリウス第1期

体は円形で第1触角，第2触角及び上顎等の3対の付属肢を有し中央に円板状の口を有する。



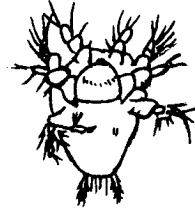
Canthocamptus staphlinus

※ケンミジンコのノープリウス第4期

体はやや縦軸に長くなり、後方に付属肢が増加する

※ケンミジンコのメタノープリウス (Copepodid)

この時代になるとほぼ成体に近い形態となり頭部の付属物及び2対の遊泳肢が完成するが、又肢等は十分な成熟はしていない。

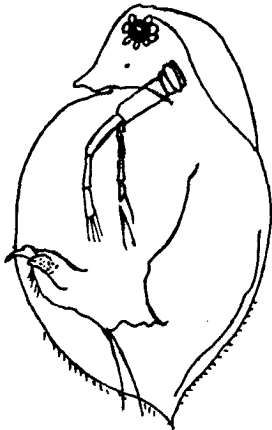


ミジンコ

ミジンコ (*Daphnia pulex*)

- 殻は概ね広卵形で半透明、吻が尖り、複眼が大きく、単眼が小さい。D. *Langispina*と酷似するが、後腹部及び尾爪の列によって明らかに区別することができる。後腹部は大きく、尾爪に向って次第に狭くなり、各側に12~18箇の小が並ぶ。後腹突起はよく発達し、尾爪の基部に櫛状列がある。内縁に微細な毛列が先端まで生えているのが特徴である。近畿地方では、4、5月に最も多く増殖し、秋に再び現われることがある。増殖期の終りごろに雄を生じ、雌は黒色の鞘をもった2個の休眠卵(冬卵)を形成する。

世界中に広く分布し、わが国にも全土に分布する普遍種。浅い池沼に多いが、びわ湖にのみ出現するものをD. *biwaensis* UENOとして分けられている。

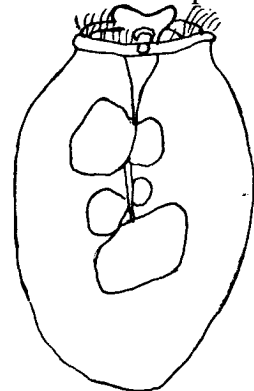


フクロワムシ

Asplanchna

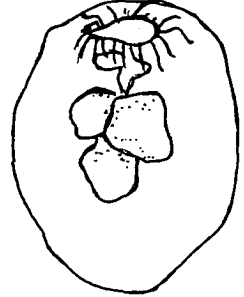
フクロワムシ (*Asplanchna priodorta*)

- 体は透明で卵円形で全国の各種水域に分布し最も普遍種。
- フクロワムシ科は、フクロワムシ属 *Asplanchna* 1属のみである。体が透明で軟かい。ホルマリン、アルコール等で固定すると収縮して種類の区別がむずかしい。アルカリ処理によって、咀嚼板の形で正確な比較を必要とする。

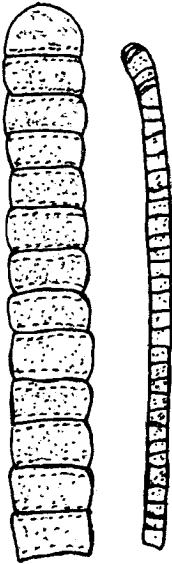


フクロワムシ

右はホルマリンで固定したために収縮してしまった状態



Oscillatoria ornata



• *Oscillatoria tenuis*

藻糸は大体真直ぐで先の方が彎曲することはあるが細くならない。先端の細胞は尖り気味の円形で帽状に膨れない。細胞の色は青緑色で接統面に近い部分に不明瞭な点紋別がある。長さは幅より短い。長さ2, 5-3, 2, 直径5-8

全国各地の湖沼, 湿地, 池溝などに広く分布し, 極めて普通汚水性。

以上が、2月21日に塘池で採集した。動・植物プランクトンである。

採集は、採集ネットによって行なった。

フクロワムシ、ミジンコが多く、特にフクロワムシは活発に活動していた。

しかし、ホルマリンで固定してしまったために収縮してしまった。

以上が、今回の採集で気づいた点である。

参考は、保育社出版の“日本淡水プランクトン図鑑”である。

1977年度 タイワンツバメシジミの記録

2年 黒葛俊弘

大浦町越路(新産地)

9月23日 少数目撃・2♂(小破)採集 (大迫達洋)

10月 1日 2♀(小破)採集 (TO)

大浦町亀ヶ丘売店付近

10月 2日 1♂(中破)目撃 (TO)

校内に多いクモ

今年5月から採集した中で特に多かったのが、ジョロウグモ、ゴミグモ、オオシロカネグモだった。そこでそれについてまとめてみることにした。

1. ジョロウグモ

コガネグモ科，ジョロウグモ属，最もポピュラーなクモで特に秋になるとどこを見てもジョロウグモばかりでうんざりする程。1つの巣に5，6頭も同居している場合があるがよく注意して見ると，な，なんと雌1頭に雄4，5頭。うらやましいことである。黄と緑青色のまだら模様で足も黄と黒のまだらなのが雌で，もちろん体も大きい。そして，なんともたよりなげで，雌の鮮やかな色に対し，けっさめてしまったようなのが雄と置いていただければよい。

2. ゴミグモ

コガネグモ科，ゴミグモ属。なぜこのような名前がつけられているか？ゴミあさりの名人ならぬ名グモで，人さま，いやクモさまの食べ残し物を横からかっぱらい窃盗なんか序ノ口，強盗殺グモ北の湖って程かと思えば，なんのことはない。ただ食べかす，ふん，脱殻などを縦に重ね，そのゴミの山に自分は，ふんぞりかえているのである。近くで見てもどれがゴミだかクモだかわからない。それだけきたならしいクモなのだ。全体的に黒褐色で，背面に2個，後端に6個の突起を持つ。背面には黄白色のX字状斑の他に褐色・橙黄色をまじえた複雑な斑紋。複雑過ぎて何が何だかわからない。

3. オオシロカネグモ

アシナガグモ科，シロカネグモ属。背甲は黄褐色で黒味を帯びた縁があり，胸板は黒色・歩脚は緑色で末節は黒色となる。腹背両肩に隆起も黒斑もない。複雑窮まりないゴミグモに比べ，ひじょうに奇麗である。また生体に刺激を与えると腹背の3縦斑は急に太くなる。春はよく見られたオオシロカネグモであるが秋になるとジョロウグモにおされ気味である。採集した中には，ジョロウグモの雄と，オオシロカネグモの雄とが同じ巣にいたのもあった。近ごろはクモの世界にもホモというものが……。

1978年 文化祭反省

2年 黒 葛 俊 弘

1978年度の文化祭における生物部の活動を記すことにする。

〔展示物〕

- | | |
|----------------|-------------------|
| ○昆虫、クモ、蝶、鳥類の標本 | ○プランクトン(顕微鏡による)展示 |
| ○生物における文献雑誌展示 | 〔塘池、さつま湖、池田湖〕 |
| ○カエルの解剖 | ○生物部誌展示 |
| ○葉脈標本 | ○鱗粉展写 |

〔反省〕

今年度は、新しく塘池、さつま湖、池田湖のプランクトンを展示することにした。塘池の場合は別稿に示されているのでよくわかると思うが、さつま湖は、近くの人に採集してもらい、池田湖のものは、遠足の時、採集してきたものであった。人気はというと、まあまあよかった。しかし各湖ともほんの一部だけで、全部のものを展示できなかったのが残念だった。

葉脈標本は、あらかじめ200枚ほどしおりにして作っておいたのだが、すぐなくなるという例年のジンクスがあるので、1、2年前から始めている自分達で作る葉脈標本コーナーをもうけた。

見学にくる人は、昨年と同じくらいだった。今年の文化祭は全体的にみて、あまりパッとしなかったもので、来年からはさらに充実したものになってほしいと思う。

1978年度の活動状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	└──────────┘		└──────────┘			└──────────┘				└──────────┘		
採 集 会	ア オ バ ズ ク の	ベ リ ッ ト 調 査	ア ゲ ハ 類 の	飛 来 調 査 の	各 班 に お け る	採 集	文 化 祭 準 備	プ ラ ン ク ト ン 採 集				「 ま の せ 」 原 稿 書 き

シマアカネ

2年 黒葛 俊弘

シマアカネは、腹長26から28ミリメートル、後翅30から31ミリメートルの細身の中型種のトンボです。体の地色は黒色をしており、頭部前面は黄色で、前額上面には美しい藍色の光沢があり、胸部は黒色で、不規則な黄点があります。小笠原諸島の父島・母島・向島のみ生息している一属一種のトンボで、天然記念物に指定されている貴重な昆虫です。5月から8月にわたってその姿をみることができます。

なお、トンボは、成虫が陸上生活、幼虫(ヤゴ)が水中生活をする昆虫で、ヤゴ時は呼吸を体皮やえらあるいは直腸内面が特に変化した直腸鰓(えら)などによって行い、孵化の際にははじめて空気呼吸に切り換えられます。幼虫の頭部はたいへんよく動き、目は大きく、触角は退化しており、膜質のほぼ同形のはね4枚もっています。幼虫は10回から15回脱皮するのがふつうで、その脱皮ごとの形態変化は少なく、少しずつ変化して育ち、短いもので数ヶ月、長いもので7、8年(推定)、多くのものは1年から3年で成熟します。



1977年 蝶の採集記録 (その4)

2年 中田 悦朗・黒葛 俊弘

4月 1日	大浦町越路	ルリシジミ1♂採集, コミスジ1頭採集		
		ジャコウアゲハ, ツマグロヒョーモン, キチョウ	} 目撃	"
		モンシロチョウ, スジグロシロチョウ		
	加世田市小湊	ジャコウアゲハ1♂1♀		
4月 6日	竹田神社	クロアゲハ, ツマグロヒョウモン, モンシロチョウ	} 目撃	"
		キチョウ, ツマグロキチョウ, ウラギンシジミ		
		ルリシジミ		
4月 11日	校内	アオスジアゲハ, ヒメウラナミジャノメ	目撃	"
4月 12日	校内	ナガサキアゲハ1♀, ツマグロヒョウモン1♀	目撃	"
4月 20日	加世田市川畑	モンキアゲハ1頭, クロヒカゲ1頭	目撃	清川達己
		ヒメウラナミジャノメ(井)1頭採集		中田悦朗
4月 22日	竹田神社	ナガサキアゲハ(十)1♂, モンキアゲハ1♂		清川達己
		ジャコウアゲハ2♀, クロコノマ1♀, (井)		清川達己
		ヒメウラナミジャノメ1頭採集		黒葛俊弘

生物部員名簿 (1979年3月現在)

3年	清川 達己	川辺郡坊津町泊4665	〒898-01
	鳥飼 英俊	川辺郡川辺町神殿3182	〒897-02
	小田 裕徳	川辺郡坊津町久志7866-10	〒898-01
	石井 浄浩	川辺郡坊津町泊31	〒898-01
2年	中田 悦朗	加世田市小湊52	〒897-11
	黒葛 俊弘	日置郡吹上町与倉3642	〒899-33
	川原 浩二	日置郡吹上町与倉866	〒899-33
	木村 俊	日置郡吹上町与倉911	〒899-33
	今和泉 昭文	加世田市小湊2432	〒897-11
	岡 寛	日置郡金峰町白川3560	〒899-35
	中堂蘭 さとみ	日置郡金峰町大坂10223	〒899-34
	大坂 あけみ	日置郡金峰町大坂1506	〒899-34
	鮫島 敏子	日置郡金峰町大坂5896	〒899-34
	永田 千裕	加世田市川畑6919	〒897
	永田 佐織	加世田市川畑7922	〒897
1年	竹原 和人	川辺郡坊津町泊349	〒898-01
	平山 太思	川辺郡坊津町坊9183	〒898-01
	野村 佳史	川辺郡坊津町坊6994	〒898-01
	前田 俊作	川辺郡坊津町泊394	〒898-01
	長谷 道広	川辺郡坊津町坊5859	〒898-01
	船倉 文章	日置郡吹上町中里1623	〒899-33
	加治 文子	枕崎市住吉町48	〒898
	西田 裕子	枕崎市別府8440	〒898
	藤岡 美穂	枕崎市高見町15	〒898
	東 いつみ	枕崎市石ヶ峯	〒898
	若松 貴子	日置郡金峰町宮崎3349	〒899-35
	東小蘭 ひとみ	日置郡金峰町浦之名220	〒899-35

顧問 里 俊 広

編 集 後 記

やっと、出来上がりました。

なんとかすべて、自分達の力だけでやりとげられたことは、この上なく嬉しいことです。

内容は、前回「まのせ13号」と同じく、2年分の記録ですが、いくぶん活動不足のせいもあり、充実したものになれなかったことが残念です。また2年分ということで、読みづらいところもあるかと思います。これからは、一年一回のペースで発行できるようにしていきたいと思っています。

今年は例年になく、新入部員の多い年度でした。しかしながらその半面、部全体のまとまりが、今ひとつだったように思われます。なにしろ昨年度の活動部員は、五人少々とあまりにも少なく、「まのせ」を発行したくても、それだけの資料が集まらなかったのが、今回までに至ってしまいました。また、原稿の編集をしているうちに、この2年間の楽しかったこと、きつかったこと、その他もろもろのことが思い出され、あらためて、なんとかここまで生物部で頑張ってきてよかったと思いました。

さて、「来年度は、発行できるだろうか？」などと今から心配していますが、せっかく十数年続いてきた「まのせ」の火を消してはならない、簿っぺらなものになっても良いので、絶対発行させていきたいものです。内容も、伝統的なことはそのまま続けて、一方新しい分野も開いていくよう努力していきたいと思っています。

文末になってしまいましたが、いろいろと御指導いただいた顧問の先生、および諸先輩方を初め、いろいろな方々に、部員一同、心より御礼を申し上げ、今後ともよろしくお願い申し上げます。

1979年

な か た ・ つ づ ら

鹿児島県立加世田高校生物部誌 まのせ 14号 訂正表

項行	誤	正	項行	誤	正
15 12	コミスジ()	コミスジ(井)	34 1	初夏の割合	初夏の割合
	13 モンシロイワ()	モンシロイワ(井)	野原の下	アカシラヒソ	アカシラヒソ
	ヒウチシラヒ()	ヒウチシラヒ(井)	49 9	作らぬ	畑作らぬ
	ナガキアケハ()	ナガキアケハ(井)	50 6	同犬	同犬
	15 ヲマクロヒメ()	マクロヒメ(井)	同	中眠成	中眠成
	16 アケハ()	アケハ(井)			
18 32	三台	三曹			
19 18	とうじにひのです	とうじらひのです			
21 21	=普通	井=普通			
27 12	第一化糞生	第一畑化糞生			
31 9	と間との間	との間			
32 19	そこ二月二日コヒス	二月二日にはそこ			
(注) 井多い 井普通 井少ない					

鹿児島県立加世田高等学校・生物部誌 まのせ 14号

発行日 : 1979年

発行者 : 鹿児島県加世田市川畑・2782・加世田高校生物部

編集者 : 中田悦朗, 黒葛俊弘

印刷 : 鹿児島市泉町13-14 明三窓社

